THE JAPAN INTERIOR DESIGNERS' ASSOCIATION

# JID no. 62

1973. Dec. 20th. 昭和48年12月20日発行

目　次

主集＜インテリアイメージ'73＞期待される住まいの装置展
インテリアセミナー＜昨日・今日・明日＞
ほんとうの豊かさへの提案・白石勝彦／作品展の意義…渡辺　優…… 1
＜インテリアイメージ'73＞期待される住まいの装置展を見て …… 2
＜インテリアイメージ'73＞期待される住まいの装置展 …… 4
会員の声…… 6
インテリアセミナー＜昨日・今日・明日＞…… 8
スペイン・トルコ・マレーシア・中南米――スケッチ……16
かるてっと・賛助会員名簿・編集後記……18

## ほんとうの豊かさへの提案

理事長　白　石　勝　彦

「ことし考えたい、ほんとうの豊かさ」というスローガンのもとに、本年をデザインイヤーとして、デザインの認識をより深める運動が、全国的に展開されつつあります。

この運動のメインイベントとされている、世界インダストリアルデザイン会議も、国際インダストリアルデザイン団体協議会（ICSID）の総会に引続いて、10月11日、12日、13日の3日間、京都で開かれました。

デザインイヤー運動は、たゞ単に日本における運動だけにとどまらず、国をあげて展開しているこの大きなエネルギーに対して、会議参加の各国デザイナー、デザイン関係者も多大の関心をよせ、全世界へとその波紋は拡がりつつあります。

デザインイヤーの協賛事業の一環として、当協会の関西支部主催で開かれた、＜インテリアイメージ '73＞ 期待される「住まい」の装置展は、このような現状の中で、大へん有意義な催しであり、開催に尽力された会員のみなさんの努力と、協力された関係各位に対し心から感謝の意を表したいと思います。

関西における作品展は回を重ね、回ごとにその内容も充実しつつあります作品展を開催することは、大変にエネルギーを必要とすることですが、デザイナーとしてその努力をおしむことは許されないことだと思います。

本来デザイナーは文字や写真で作品を表現すべきではなく、あくまで“もの„で表現すべきです。それも実物で勝負すべきだと信じています。

デザイナーが自分の主張を盛り込んだ提案を実物で表現することは、経済的にも、時間的にも大へんなエネルギーと、その蓄積が必要です。

日常的な仕事に追われ、経済的にも恵まれていないインテリアデザイナーにとって、このようなことにエネルギーを消費することは、直接的に現実の仕事に結びつかないだけに、大へんな勇気と努力が払われるでしょう。

しかしそれが成し遂げられたときの充実した満足感は、功利を超えた「豊かさ」につながるものだと思います。

デザインイヤーのスローガンである「ことし考えたい、ほんとうの豊かさ」は、わたしたち自身の問題でもあることを忘れてはなりません。

関西の会員諸士の努力に感謝すると同時に、他の会員の奮起を期待し、協会あげての展覧会が近い将来に開かれるよう願っております。

## 作品展の意義

副理事長　渡　辺　　優

デパートで行なわれた前回の展覧会では、新しい試みの作品も、何か商品的に見えたけれども、今回の美術館での展示では、どれもが芸術作品に見えたのは、見る方の人間が単純だからかもしれない。

俗っぽいものは芸術ではないとすれば、デザインの分野の仕事は、俗世間的な面が多いから、芸術的ではあっても芸術作品ではないのかもしれないが美術館の空間におさめられると、どれもが生臭さが薄れてさわやかに見えてくる。どちらかといえば実生活的な機能性より、造形性の方に関心が向いてしまい勝ちである。

そういう点で、まとまりのよいものより、やりたいことがキチッとおさまらずに、計算が合わず余りが出てしまったようなものが面白く見られたし、示唆するものも多かったように思う。

今日の住生活における、具体的な提案を見せる場として、やはり展覧会の意義は評価されてよいだろう。

大阪の会員の方たちの実行力には、いつもながら敬服する次第だが、本格的な協会展を実行に移す時期に来ているのではないだろうか。

# ＜インテリアイメージ ’73＞期待される住まいの装置展／を見て

## 雑　感

㈶大阪デザインセンター業務課長　館　哲郎

大阪から神戸に近ずくにつれてどことはなくハイセンスとエキゾチックな雰囲気が感じられるが、その神戸において開かれた今回の催しは、誇り高い神戸っ子にも大きな示唆を与えたのではなかろうか。

ネーミングも「住まいの装置」とうたったことは今後のインテリアを指向したものでフレッシュな匂いがたゞよって意義深いものがある。

たしかに家具からくるイメージはタンス・長持に代表された時代の延長で今日のように多品種、またそのデザインも多様化してそれぞれが住まいを快適なものにする装置となりつつあることを考え合すと当然ネーミングチェインジも必要であろう。

また展示品についてもこの種の催しにありがちな単なるショー的なものは少なく明日のインテリアを拓くものとして共感を覚えた。

たゞ今日のインテリア産業界がこれらをどう受け止め、市場性を持たすのか多少疑問の点もなきにしもあらず業界とのアプローチに積極的な努力を期待したい。

また一方一般的日本人の住生活はタタミと椅子、ベッドの二重構造、日本的嫁入り道具と西欧型家具との同居生活、恐らく世界でも類を見ない生活体系でしかも世界一高い地価、高騰する諸物価によって棟割り長屋や鉄筋２ＤＫ箱の生活が余儀なくされている時にインテリアデザインの庶民生活への滲透未だしの感があるのは悲しいことである。

「車を買う金をインテリアにかければ日本のインテリアデザインは格段に良くなるのだが……」いみじくもあるデザイナーから聞いた言葉である。

車公害、交通地獄、車に対する批判が巷にあふれる中で何十万円という車が飛ぶように売れていく。しかも５年も経てばその価値は０になるというのに……。２ＤＫのアパートでインテリアデザインなど考える余地さえない住人が車を持つ、家が持てないからせめて車でも…。一つの理屈かも知れないがなぜもって自分の住まいに目を向けないのだろうか。一方では土地成金はたゞ金をかけただけで目をむくような部屋の中でふんぞり返っている。こうして見ると日本人のインテリアデザイン感覚は全く幼稚といわざるを得ない

成長産業ともてはやされるハウジング、これにともなうインテリアはそのマインドの欠如によって薄っぺらで俗悪なものにもなりかねない。

辿る道は険しくとも一歩一歩インテリアデザイナーの努力によってこの催しが積重ねられ大きな波となった時、ほんとうの意味の「住まいの装置」が花開くものと固く信じそうあることを念じてやまないものである。

## 展を見て

ナンバ総合デザイン研究所
ナンバデザイナー学院　高久昌夫

生活の多様化に伴う、インテリアの混乱にデザイナーがある指針を与えるということは意義深い。

しかし、生活への提案として力みすぎると抵抗を感ずる。イージに流れると、販売店などで見られる好奇な展示に終ってしまうであろう。

デザイナーが一人の生活者として直面したとまどい、それに対する一つの解決を試みようとした富田卓司氏の作品。「壁に棲む」の安藤忠雄氏の提案に共鳴を感じた。生活的な力がある。それらの問題が多くの人々の共通のものであればある程、説得力を持つであろう。デザイナーが啓蒙的に外に向けていたものを内に向けるとき、意外に人を動かすデザインの本流を見出す。「家族や親しい人と食事をしたり、話し合ったり、ときには寝ることも出来る道具とはどんなものか」「最少これだけはほしいもの」「私たちが“形づくったもの„は何かをふりかえって、“住まいのFORM„をまとめること……」と、いみじくも富田氏は云っておられる。人のため、企業のためではなく、当世風に云うなら原点へかえってデザインを内側より見つめることを、案外に忘れてはいなかったか。

感銘をうけた展示会であった。

尾畑祐司氏「スペースづくりのエレメント」。加藤礼三氏「連絡する家具」本田安治氏「憩いの場」。平井進氏、「SYSTEM HOUSING OF THE WALL」福岡喜久雄氏「だんらんのスペース」山口道夫氏「インテリアテキスタイル――新しい可能性」などなど、興味ある提案であった。また、新居猛氏の「ローコストファニチャー」の徹底した追求に敬意を表する。

特に、並川拓史氏の「ルーム＆ファニチャー」は床坐のすまいに焦点を当て色彩をそえたあそびを強調し、ゆたかさを求めた試業は人々の共感をそそったようである。

これらの提案が“イメージ„として終るのでなく“リアリティ„として残ることを希っています。

## 展を見て

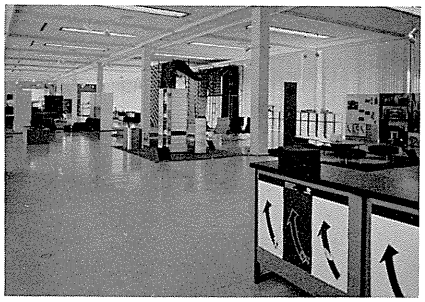
永大産業㈱開発部次長　兎本　進

期待される装置展と云うテーマに対して、まず「装置」と云う言葉の持つ意味あいに大きな期待をもって展示会に望んだ。即ち我々が日常的に考える「装置」とは舞台装置とか機械装置の様に、電動的なメカに近いものであり、云い変えれば昔の忍者屋敷のからくりとか、近代的な電動システムによる装置と云ったものである。しかし今こゝに展示された各作品の持つ意味は全く異った生活文化の創造の為の装置であり、より快適な生活の為の住空間を合

理的にかつ、多様性のある道具として実にみごとにまとめ上げられたものである。

日常私達が市場にて多く目にし、又住宅家具として使用しているものの大部分は、一つの使用目的に限定され規格化されたものである。例えば、いすと云う機能のみを追求するならば木の根子でもよいし、ブロック石の積み重ねでもよいわけである。しかしそれでは移動にも困るしフォルムの美しさも見られない。こゝに種々のデザイン、機能の工夫がなされ、すわるものの道具として変化して来た。しかしこれらは余りにも格一化されすぎた形のみの追求に走り過ぎ、人間が生活する為のより快適な道具ではなくなって来ている様でもある。部屋におく道具ではあっても、その道具が生活は造らない。こう云った意味に於て、この展示会に於ける作品は実に多様性のある道具として、それぞれの生活を生み出しており興味あるものであった。個々に付いては日本人の生活として見た場合、多少難解なものもあったが、一つの方向を示すものと見たい。

さらに望むならば、一つの道具にしても、生活空間としても、全く意味のもたないもの、全ての条件、制約を廃棄した無性格なものが、今後の住空間として必要な時代が来るのではないだろうかと云う事である。そこに原始的な意味とは異った本当の「いこい」の空間があるのかも知れない。地球上に氾濫した道具属に人種が征服されない為にも。



●インテリア・イメージ'73展　会場全景

## 期待される住まいの装置展をみて

株式会社　志野陶石社長　柴　辻　政　彦

現代都市。

それも、とり分け日本の新興都市の今日の様相は、まったく「実験都市」という他はありません。様々の考え、思想によって、多種多様な実験建造物が試みられて都市を構成しているかにみえますが、丁度、住うための諸道具類も同じような様相を呈している風にみえます。日本の伝統の家具、ヨーロッパの古いもの、北欧の木質のもの、イタリアのモダーンなもの、そして前衛的な考えのものまで、さまざまの考え、思想によって多種多様な住うための実験家具が試みられ、住いを構成しているようです。

「物」が手慣れて、美しく、便利で、快適に生長するためには、それが住う建造物でも、あるいは住いの為の道具としても、永い永い時間をかけて、細かい欠点をおぎない、改良して、その次の時代にもまた改良されて、永い時の流れを経て来なければ、本当の優れた、美しいものは獲得できないものだ。使い慣らされて、人の心が物に移るほど物と人が密着しなければ、物の真価は見定めがつかないものだ。そんな風に私は聞かされています。

本当にそうかも知れません。

古い都市のよさ、古い道具のよさ、それが育ってきた紆余曲折を振り返ってみると、そのもののもつ「価値」の多くの部分は長い歴史の中でいく度かの「転機」を迎えながらその度に少しづつ価値を高めているようです。　'73年、期待される住いの装置展が、住まいの為の道具としての立場で「実験型の新しいもの」と、そして「改良型の新しいもの」との、二つの世界の啓示であったことを願いながら……。

## ユニークな態度とその実践

理事　豊　口　克　平

展覧会計画、特にインテリア展の計画、実施のむずかしさを痛感させられるこの頃である。

それは現実の日本の住生活（特にスペースの限界）や国民の所得の貧相さを考えるとき、またこれからの日本人の居住様式が衣食の全体像の中で如何にあるべきかを考えるとき、又海外の輸入家具、装置の優れたものを見せつけられるとき、日本の伝統的生活、永いこれまでの意味ある存在価値を考えるとき、デザイナーは単なる夢や遊びの未来を想像するビジョンや創造意欲だけでは、割切れない虚しさ、さびしさを心のどこかに感じさせられるからである。といって市民の啓蒙に名を借りて現実的に散見する自分達の市場へ送り込んだ製品を展示することには心満たされぬ意気地なさを感じるのである。

会員が多くなった協会主催の展覧会は毎年流産に終るのも、こうした悩みに由来すると思われる。のみならず実施のためのメーカーとの試作協力あるいはスポンサーとの経済的協賛なしで開催することのむずかしさや悩み。

関西支部は今回第3回の展覧会を重ね、すこぶる上手に処理し、回を重ねるごとに、その質、目的を現実と創造をふんまえてユニークな制作、展示を見せてくれたことは実にうれしく、また努力と計画のうまさに絶大の敬意を表したい。特に石川四郎氏、尾畑祐司氏、富田、伊藤両氏、並川拓史、本田安治氏のデザインに深い共感をもち楽しかった。

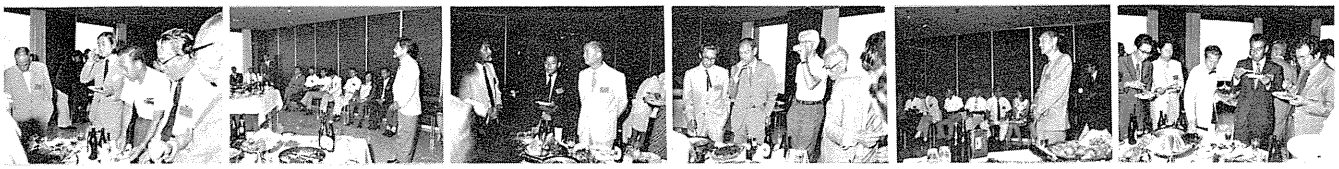
# ＜インテリアイメージ ’73＞期待される住まいの装置展

■会期　昭和48年7月24日(火曜)→29日(日曜)■会場　兵庫県立近代美術館1F展示場■主催　社団法人日本インテリアデザイナー協会関西支部
■後援　財団法人大阪デザインセンター・神戸新聞社・デイリースポーツ社　■協賛　インテリア関連企業60社
■併催　インテリアセミナー　□テーマ　「昨日・今日・明日」　□7月28日(土曜)PM 2:00→4:30　□美術館構堂

●NO.1　　石川　四郎　「住まいの中心　L・Dへの提案」
L・Dのユニットコンビのウオールマスターと囲む椅子と卓子との試み「食事」「お茶」「団欒」「トランプ」「麻雀」「天板反転」

●NO.2　　上野　忠之　「公共住宅型キッチンユニット」
機能的な作業空間、設備の高度化など、品質の向上が要求される台所まわりにおいて、ユニット化は適切な方法の一つである。このキッチンユニットは、単に合理的で無駄のないユニットという事のみにとどまらず、作業する人間にとって、働きやすい空間を作り出し、配管部分は完全に一体化させている。主な特徴として、

1. 調理・収納・給排水・ガス・電気・換気の全ての機能が含まれており、集中給湯の利用も容易。各種のオプション部品も用意されている。
2. 部品は全て工場生産で、現場作業の省力化を計り、品質管理・検査も容易である。
3. このユニットは構造システムとして独立しており、高さ・奥行調整及び開口部への対応も考えられている。



■作品展初日多刻5:00から神戸貿易センタービル17Fレストラン「バーグ」で、財団法人大阪デザインセンター・神戸新聞社・スポーツニッポン新聞社・メーカー代表を迎え、協会側白石理事長・豊口理事・関西支部岡村・川崎理事・出品者・支部会員を含め約200人、記念パーティーは川崎・山口の司会で進行した。パーティー担当　山口道夫記

●NO.3　尾畑　祐司　「スペースづくりのエレメント」

広さの限られた現代住宅。大きな空間を動きのとれない壁面で仕切って「部屋」をつくるのではなく、多様性のある家具の組み合せによって、夫々の「場所」をつくり、異った住まい方が出来るのでは……とその一部をここにまとめました。

●NO.4　加藤　礼三　「連続する家具」

量産される単一部材が、繰り返し、連続的に結合されることによって、特定の機能をもつ家具を構成する。いわば＜SEQUENT FURNITURE＞の概念を示すものである。材料はアルミニュームを使ったが、或るものについてはプラスチックの使用が可能であり、デザインはコスト的な面からさらにリファインする必要があろう。

●NO.5　富田　卓司・伊藤　譲二　「わたしの部屋の道具」

早急に自分がいつも使う部屋をつくらなければならないハメになった。勿論部屋を守るシェルター（家）も。

家族や親しい人と食事をしたり、話し合ったり、ときには寝ることも出来る道具とはどんなものか。今、考えてみると最小これだけはほしい「もの」の試作１号であります。畳生活のFORMはわたしたちがうけついだものである。椅子・テーブルは直移入である。わたしたちが「形づくったもの」は何かをふりかえって「住まいのFORM」をわたしなりにまとめることをこれからも続けます。

●NO.6　並川　拓史　「ルーム＆ファニチャー」

すぐれた伝統をもつ床坐の「すまい」の原点をさぐりながら……　たべる・いこう・ねる・あぐら・ねそべる、開放的な巾広いヘヤ的な家具。松材と無彩色のシャギーをベースにさまざまなパターン・大きさ・色のクッションなどがその目的を簡潔にしています。今日ほど、あそびの面が、ゆたかな「たたずまい」としてほしいものですし、そんなものを求めてみました。

●NO.7　新居　猛　「ローコストファニチャー」

私の椅子は、戦後ささやかな便利大工をしていた時からの発想で、今流行のデレクターチェアーを当時造り、徳島では売れないままに、生意気にこれの改良型を目ざしたのが始りです。このデレクターチェアーの横にシートを張って身体のどこにも堅い所の当らない掛心地良さと、便利で安上りの構造を土台に、これにプラスαの独特の椅子を作ってやろうと工夫をこらしたのがニーチェアーです。そんな事で今ようやく月産五千台位。アメリカ・ヨーロッパにも三割位出るようになりましたが、私ののんべんだらりの性格から今まで随分長い時間を要したようです。去年十月にパテントを申請、もうフランス・西ドイツが下りて来ました。日本ではこの九月三年余りかかって登録なりました。

●NO.8　平井　進　「SYSTEM HOUSING OF THE WALL」

中級程度の住宅に使われるWALLユニットである。通る・使う・収納する・仕切るはどんな場合でも必要である。

(A)表面仕上げと下地ユニット　(B)A・WALLと内部ユニット　(C)A・Bと床・天井ユニット　(D)Cと設備ユニット　(E)DとWグリットモジュール　(F)Eとプランユニットなど24行の組み合せを綜合的にシステム化している。

●NO.9　福岡喜久雄　「だんらんのスペース」

高いレベルの生活イメージを演出する装置。いこいのある、やわらかな生活空間を計画。

●NO.10　本田　安治　「憩いの場」

全べて、創られた住空間には居間とか食堂と云った使用分類のカテゴリーを除外してみた場合に、なお、人々に有用であるか否かを決める空間の顔が必ず存在する。それは、材質・色・形など素材個有の美が「使いやすさ」の合目的性を超えたところで働き合い人々の心を左右する象徴性を得るか否かの鍵を握っているからであろう。素材を伝統的なものに求めた「憩い」の場の試みである。

●NO.11　山口　道夫　「インテリアテキスタイル」

テキスタイルを通してインテリアデザインに於ける新しい可能性を求めることが出来ないかと、数種の方法にもとずいた作品を創っていますが、これらの製品はその内の一つのタイプ「存在性」「発言力」のあるグループの一部です。

●NO.12　後藤偉沙雄　「聖域」

吾々は豊かさを求めて、案外、豊かでない方向に向って走っているのではないか、という疑問がこの作品の背景。「もの」に埋もれ、「もの」に奉仕する生活に訣別し、質素でもよいから、人間性主体のインテリアの復権が望まれる。空間も一つの装置であり、しかも第一義的装置である。きたない水・空気・食物・日々破壊される緑、心身をかきむしる騒音、「もの」の氾濫、この様な環境下に於いて、住まいに「静かなる」「聖なる」「清浄なる」空間が期待される。そこは、自分が自分自身に戻る場であり、祖先との対話の場、また宇宙との対話の場である。

●NO.13　向井　修二　「生活空間のメジャー」

人間の生活における三要素、カジュアル・レスト・ビジネスと大分類し、それらの各空間における物質ラインを、コンピューターによってつなぐと、このような形になる。生活空間における家部・衣服・用具 etc等をこのゴムで出来たゲージにあてはめることにより、それらの物質の生活用途分類と、デザインにおける適性レベルを確認するためのメジャーにもなる。

●NO.14　安井　忠生　「一度尋ねて見たい住まい」

日本人の住まいは社会性を拒ばんでいる様にさえ見える。社会から隔離した住宅＜生活＞は、単に、生活が出来ると言った生息機能に終始しいくら最新の生活機材をならべて使って見ても、いたずらに生活様式が繁雑になるのみで、楽しい豊かさが得られるだろうか、心配する。

本当の住まいは、住む人の個性＜生活・文化・思考＞が住まいの隅々に生かされ、工夫され、その嗜好・機能が生々として空間を育てゝいる事である。経済性云々の前に、住まいの思考が社会の文化的要素を住まいの中に持って、はぐくむことが必要である。これからの住宅が家族の生活基点として果す機能から、家庭・知人との社交の場としての思考がほしい時代である。

●NO.15　安藤　忠雄　「壁に棲む」

久方ぶりにあった学生時代の友人から家の塀を改造する相談を受けた。物価の上昇と地価の高騰に、我が棲みかを探しあぐねていたところであり勿怪のさいわいと他人の土地を占拠し、2m500×20mの壁内に、棲息しようと試みたものである。

# ＜インテリアイメージ ’73＞期待される住まいの装置展／会員の声

## 展を省みて

作品展委員長　並　川　拓　史

前回までのコマーシャルベースの場とは全く異った美術館を選び、さらに有料にするなど、自ら、きびしい条件で不安をいだきながらも、新しい問題を提起し展開することによって当協会の主体性を明確にすることができ成果があったと思う。

会場構成は出品数からみると、やゝものたりない面が、むしろゆとりのスペースとして効果があった。

出品内容については、現実の生活との＜かかわりあい＞など、問題点もあっただろうが、くり返し相互の接点をとらえることが課題だろう。

計画から実行まで、再度富田支部長の献身的な奉仕にあまえ、只感謝あるのみです。全会員のもりあがりに欠け、出品者、実行委員会の固定化、またマンネリ化した体質と運営の中、今回の作品展は意義深いものがあったと思われます。

作品展担当者として御協力頂いた各位に厚くお礼申し上げますと共に、次の機会にはより多くの会員が参加されることを望みます。

## 展を省みて/会場交渉の立場から

南　原　七　郎

村野藤吾設計の兵庫県立近代美術館で、＜インテリア・イメージ ’73＞展が開催されたことは、近代美術館側としては初めての試みで大きな夢と期待をもって開催を引き受けて下さったことは非常に有り難いことであった。

近代美術の造形面の一端をになうデザイナーとして、如何に前衛的なインテリアを展示し得るか、如何に明日への住まいの課題を提供し得るか、この造形面、機能面での問題の提示、それが未来に向ってどう叫ぶかが大方の期待ではなかっただろうかと想像された。

その意味で、百貨店での展示とおのずからその性格が異って来るものがあったし、時代を前進するに足るデザイナーの心意気がにじみでていた点で充分その意義を認められるものであった。現在の社会に問題を提示し、それをインテリアのシビアな造形面で表現することの困難さは申すまでもないが、われわれインテリア・デザイナーは、この困難をのりこえて明日のために不断の努力を払っているのであるから今後この種の姿勢は常にくずさずに進めてゆきたいものである。モリスのレッサアートの精神を堅持し、一段とシャープに問題を提出、解決して行く方向こそわれわれデザイナーのつとめであると思うと共にこの会場を選定した今回の意義をかみしめたい。

## 展を省みて

後藤　偉沙雄

＜インテリアイメージ ’73＞は、いわば「本当の豊さ」に対する理解とイメージの展覧会でもあったわけですが、結果として、われわれの理解力とイメージ力の貧困さを露呈しなかったとは、必ずしも断言できない様な状態ではなかったかと反省させられます。

出品者各自の問題意識の相異は当然ですが、正直言って問題意識の甘さが全般的に無かったとは言い切れない様に感じました。この点は最も反省されるべきであろうと思います。殊に、現今の様な終末的世相において、もっとシビアな問題意識がなければならない筈だと、自身の勉強不足を反省している次第です。

消費文化から節約文化へ、物質観から精神観へと価値観の転換の必要性が云々される昨今、また、産業主体から生活者主体への移行の傾向もみられる昨今、デザインそのものの在り方が問われなければならないと共に、デザイナーの意識そのものも問われなければならない段階にきているという気がしました。その意味において、美術館を会場としたことは、期せずして示唆的であり画期的ではなかったかと思います。

ともあれ、無事に終了したということだけでも成功であったというべきであり、会員各自の献身的努力、就中世話役の実行力には頭の下がる思いです。

今回の企画を先駆として、大衆デザイン運動の発展することを祈りたいと思います。

## 展を省みて

坂根健一郎

不出展会員のたわごとと御容赦願い若干の感想をのべさせて載きたい。

先づこの催しを大成功に導いた担当各位の卓絶せる企画演出実行力に万腔の敬意を表するものである。’73デザインイヤーの参加行事としても大きな意義を持ち、また協会関西支部史上画期的な節を作ったことと確信し、感謝するものである。会場・パーティ・セミナーを通じ会員並びに関係各位の主張・提案・意見交換等が活発に行なわれインテリアに対する未来への洞察、試行錯誤・問題提起等、結論を得ぬまでも今日日本のインテリア界が内臓している諸病根を摘出し得たことは大なる成果であった。これにメスを加え抜本的な手術を施しその方向を設定したり、秩序立をしたり、その解決点の発見に努力する等は協会に果せられた今後の課題であろう。協会の存在意義も理念もここに存することを我等は再確認すべきであろう。我等はインテリア各分野（行政・教育・デザイン・著作・製造・流通等）の活動を通じ社会に寄与貢献する。即ち公私の庶民の住生活に美と潤いと利益を与える使命がある。また如何なる場合でも人間が主体であって、物は従であることを忘れてはな

らぬ。即ち発想思索行動の基盤を人間の生命尊厳に置くと云うことだ。と同時に自分の置かれている個の立場を全体像より観ずることが肝要である。換言するならば遠でもなく近でもなく正視眼的に物を観ずると云うことだ。と同時に欧米一辺倒の姿勢を反省し日本民族の特策をもう一度歴史的・地質的に考察し住生活の原点を分析して自然と調和を保ちつゝ未来のインテリアの方向・目的を洞察しつゝ今日・明日の発想なり、物造りをなす時に来ていることを我々は痛感するものである。

## 作品展経過報告と支部の問題点

支部長　富　田　卓　司

デザインイヤー協賛事業、<インテリアイメージ '73>期待される住まいの装置展は、関西支部（在住会員69名）のメイン事業として、昨年6月21日第1回委員会で支部事業計画に組み入れて以来、支部総会・研究会各2回を含めて、開催直前の第7回委員会迄に、作品展に関連した打合回数は通算18回、会員の約半数（31人）が最少1回から最多18回とも出席し、延 140人、平均7.7人の出席で開催にこぎつけた。この間、全員に発送したアンケートは47年9月、内容は作品展に出品を呼びかけると同時に、会期・会場・運営費・出品物の製作費とうについての意見を聞いたもの、返信数25通（36.2%）。第2回のアンケートは今年2月、再度支部全会員にⒶ作品展、Ⓑレポート、Ⓒセミナーのいずれかに参加を呼びかけ、同時に参加内容を記入するもので、15通（21.7%）の返信を受けた。平均するとアンケート返信の受領平均20通（28.9%）、従って打合せ出席率11.1%アンケートに対する関心度28.9%でこの作品展は進行したことになる。不参加の側からは、強行したとも考えられるが、今のところそれらしきご意見は無く、白紙委任のようでもあり、今回め作品展の様な機会にはっきり現われて来る①会員の関心度は、今ふり返り、これから考えて見なければならない支部の問題であると思う。

次に②出品者16人（23.1%）の内訳について、前回協会が行なった職域調査区分表にのせて見ると下の表が出来る。

| | 協会員の56% | 関西支部 | 作品展出品者 |
|---|---|---|---|
| フリー | 93人(45.5%) | 19人(27.5%) | 10人(52.6%) |
| スタッフ | 72人(35.2%) | 44人(63.7%) | 5人(11.3%) |
| 教育者 | 26人(12.7%) | 6人( 8.6%) | 1人(16.6%) |
| その他 | 12人( 5.8%) | | |
| TOTAL | 204人 | 69人 | 16人 |

19人のフリーデザイナーの52.6%が出品者となり、支部構成会員の63.7%を占めるスタッフデザイナー44人の中で出品者5人（11.3%）にくらべて、アンバランスである。先の①進行過程の関心度と同時に、上記②出品者職域比が支部内の問題として浮かんで来る。

③協賛メーカー(40社・1口50,000円53口・1人平均4.4口)に協力を依頼・交渉した会員数12人（17.3%）の内、9人まで出品した者である。作品展の主たる財源を確保のために、出品者が交渉し依頼するのは当然のことであるのかも知れないが、こゝでも82.7%の無関心があるようにも思われる、このことは又それだけの潜在的財源とも受けとめると、今回以上に大きな支部の事業も可能であるとも考えたい。

④入場者について、前回第2回展の会場（大阪駅前阪神百貨店8F催場）では、通り過ぎる人達も含め6日間の入場者延50,000人、異状な混乱・過密とも云える状況であったことを思いおこし、今回はじめて整理を兼ね一般200円、学生 100円の有料にした、24日初日は招待者を含め51人、最終29日 250人、TOTAL780人、1日平均130人、6日間を通じ過疎的な静けさ、ヨーロッパの近代美術館なみの入場者数を見て、やゝセーブし過ぎた感じで終了した。新聞とうを通じ呼びかけの努力は不足と反省している。

⑤広報、会期前と会期中のマスコミとうに対するアプローチは手不足で、やゝ低調であったと反省。目についた範囲の掲載紙・誌は後援神戸新聞社2回・読売新聞社1回・室内9月号3頁暮らしの装飾9・10・11月号各月16頁・デザインイヤーニュースNo.4－2頁・新建築・店舗デザインその他業界紙に掲載されている。

⑥作品について、静かで広い、申し分のない会場を提供していただいた兵庫県近代美術館に出品者全員からお礼を申し上げます。作品展の功罪、作品個々の批評は会報紙上でいただくとして、デザインする者にとって、「もの」を創り、自由に発表し、好意的な理解者と語り合うことは、最高のしあわせである。インテリアデザイナーである前にデザイナーであることを反省する機会としても、作品展はこれからも継続して関西支部の事業であってほしいと思う。

## 作品展会計報告

支部会計　尾　畑　祐　司

| | | |
|---|---|---|
| 収入 | 協賛金(43社53口×50,000) | 2,650,000 |
| | 寄付金 | 10,000 |
| | 小計 | 2,660,000 |
| | 入場料 | 77,700 |
| | パーティ会費16人 | 32,000 |
| | 作品展費(協会会計より) | 150,000 |
| | TOTAL | 2,919,700 |
| 支出 | 印刷費(案内状・封筒・カード | 1,702,780 |
| | 会場使用料 | 92,500 |
| | 会場構築費 | 300,000 |
| | 撮影料(会場・作品他) | 234,990 |
| | パーティー費 | 108,590 |
| | セミナー(講師謝礼他) | 177,820 |
| | 郵送・交通費 | 70,395 |
| | アルバイト料(6人) | 95,400 |
| | 雑費 | 43,050 |
| | 予備金 | 94,175 |
| | TOTAL | 2,919,700 |

# インテリアセミナー「昨日・今日・明日」

NO 1

■28日（土曜日）2:00から4:00迄、美術館小講堂で150人の椅子席に聴講者約200人を超える盛況のため、急遽予備椅子を全員で運び上げるなど、予想以上の入場者を迎え、基調講演京大会田雄次先生のズバリご意見を終始熱心に拝聴した。こゝに4パネリストの発言要旨を含め、要約して掲載致します。セミナー担当　児玉潤吉記／文責　本田安治

## 衒いのない「かたち」をもとめて

京都大学教授　会田雄次

私は、デザインのことは良く知りません。それに、デザイナーの方にご厄介になる程上等の家具など使っていません。しかし、日常の経験から申して、どうも皆さん方がお作りになるものは、私達が座ったりする生活感と、うまくマッチしない。昔、軍隊では体に靴や服を合わせるのではなく、靴や服に体を合わせるのだ、と絶えず叱られた苦労があるが、今のデザイナーの方によると、どうもそれは、お前の体の方が悪いのだから、このデザインにお前を合わすべきだと、叱られているような感じが絶えずいたします。しかし、そういう意味ではこれは昔から日本の伝統ではないかと思います。
きょうは先ずその事を、お話ししてみようと等います。

あまりデザイナーの事は良く知りませんが、ヨーロッパと日本の比較で、ヨーロッパの家具がこうだから日本の家具はこうあるべきだ。ヨーロッパの家はこうだから日本の家はこうあるべきだという話を良く聞きます。勿論この場合は、体格が大きい、小さいとかそのような事を問題にしようとするのではなく、家についての根本的な考え方が両者では異るという気がします。

先ず、日本ではどうして家屋が不動産になっているのか？これが私にはわかりません。ヨーロッパの受け売りで「土地と家屋は不動産」という風に、誰かが決めたのか知りませんが、明治以来そうなっています。不動産とは動かない事ですから、日本の家屋はどう見ても不動産ではない。日本の家は、30年ももちません。一方ヨーロッパの場合、かなり安物の家ですら、少なくとも建てられて300年ないし500年はもちますこれは事実です。そして日本で珍しい事は、大体、人の寿命と家の寿命がほぼ匹敵するという事でありましょう。しかし、古寺など永く維持できているものがあるではないかという事になりますが、これは修理を重ね、又想像もつかぬ位たくさんの費用を使うから、あのようなものが残るので、普通の民家なら40年、今後建てる建売住宅だと、20～30年ももたない。大体に於て60年でダメになってしまう。そして、日本では60年平均で大震災が起き建てた家屋がことごとく崩壊してしまう。そのような、ヨーロッパにない条件を持っています。だからある意味では日本人はその分だけ余計に働らかなければならないともいえましょう。

これはパリの例ですが、友人の泊ったマンション、5階建てで20軒位いが住んでいて家賃が8万円から10万円位ですから、その下の階に住む門番兼家主のおばあさんは月々200万円位の収入があるわけです。この建物はいつ頃のものかと聞くと、「200年前、私の五代前が建てた。それ以後修理なしでエレベーターだけを取り付けた。」ということでおそろしく時代物のエレベーターが上り下りしている。とにかく200万円を月々受けとり未亡人が住んでいるのですから大変な金持ちで、彼女が夜会へ行くところなど体中ダイヤを付けたお化けという格好です。

日本では、戦争などを抜きにしてですが、そのような事は考えられもしない。一旦建てれば修理もせず200年以上、もっとということになれば、椅子もテーブルもすべてのものをそれに応じて考えます。ヨーロッパの古い家では、先代の祖父が使った机だとかフォークだとか、そのようなものを現に使って生きておりますが、日本ではそのようなことは、考えようもありません。これは日本がヨーロッパ化し、アメリカ化してどんどん生活が変わっているからだという事だけではなく、本来潰れるもの、ないしは飽きがくるものという形で家具その他が作られているのではないかと思います。

イタリア人などには朝から晩まで椅子を磨いている人が居ますが、それはもう物を大切にしています。

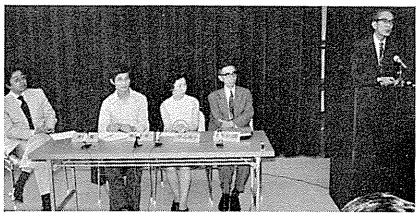
日本は根本の家が潰れるのに家具だけを大事にしてもしようがないということであって、永久にもつという意味では物を作らない。つまり一時製品、精々耐久消費財という立場で大昔から考えていたのではないかと思います。

伊勢神宮の20年遷宮が一番良い例であれは建物を潰すだけではなく、そこにあった家具、調度、一切合切新しく作り替える、それにより却って新しいものが守られているのですが、あれが日本の根本的なものの考え方ではないかと思います。その点ヨーロッパの近代的なものとは感覚がまず違います。家が不動産という考え方は、私達がいう不動産の考え方ではなく、ヨーロッパの場合は本当に不動であるということ、それを先ず頭の中にしっかり置く必要があり、それなしに両者を比較することは無理なんだと思います。

以上が第一番目の問題で、次に古代の問題ですが、日本の美意識について考えてみたいと思います。

確か昭和10年頃からだと思いますが、法隆寺の昭和大修理が始まりました。当時それを引受けられたのは、京大の天沼先生、村田先生など建築学会の方々だったと思いますが、その場合文部省その他の要求は「創建当時の姿に戻せ」という事だったのです。つまり法隆寺は何度も修理を重ねて大変歪んできている。特に徳川期の修理は妙なつっかい棒を取付けたり、装飾を施したりして、変形してしまった。それ等を取除いて本来の姿に戻すことが根本的な要求だったわけです。
そこで先生方は、初めからまず手掛けようというわけで、平安末期か鎌倉初期だと言われている。鐘楼を手始めに解体修理して元通りに組立てました。そこで大問題が持ち上がったのです。

NO2



●会田　雄次

つまり、建物は真赤な色、中国朱の紫がかった凄まじい色が塗られ屋根はピカピカに光りました。周囲の人々、というより古文化などやってる人は「とんでもないものを建てやがって」博覧会の出来損じのような途方もないものにして、これじゃあ無茶苦茶になる。」と非難が轟々と集中しました。ところが驚いたのは先生方で、私は駸々堂などで村田先生等がこぼしておられたのを今更のように思い出します。「創建当時の姿に戻せと言ったじゃないか、創建当時はこの通りじゃないか」と。それはいかにも漢学者的な感覚と、歴史家的、文化財保護家的な感覚との相異なんですが。

法隆寺は、そもそも中国文化のそっくり丸写し、移植文化ですから「青丹よし」と歌われているように、何でも青色と丹色が良いということでそのまま作ったものなのでしょう。創設当時の法隆寺をみるには、今現在のあの回廊の中に生えている余計な松の木を除き、周辺の松の木も切り倒して境内は中国式に白砂を敷き、紫がかった朱色の柱とか塔を造りその上に毒々しい青色か、ピカピカに光った屋根をのせ、その中に毒々しい原色のものとか金色燦然と輝く仏像を置いてこそ、始めて古代の日本人が感じた美の姿が生まれて来ると言えるでしょう。

日本人は大体信仰よりも美意識で入りますから、この綺麗な仏様といって喜んで拝んだのであって、現在の自然と融合してきた姿を拝んだのではない。もともとは、自然と融合するのではなく、自然と拮抗しそれを圧倒するものということで、奈良のお寺など、そういうものが造られていると思います。それなのに、何故か私達は、未だに日本の美とは自然と融合したもの、それを日本人は永遠に求め続けてきたと考えている。

日本人はかって、金ピカ、ごて塗りが好きだった。私はそう思います。その証拠に一番おもしろいのは銅鐸ですが、あの古代の変な鐘ともなんともつかぬ銅鐸が出てきて、歴史家がその目的を見つけるのに大変苦労したんですが、今度、どういう風にして造ったかということを、全く新しく造って割ってみたら、初めて判った。金色眩い絢爛として出てきた。このピカピカだから、古代人は喜んでこれを宝物だとかいって大事にした。あれは銅ですから直ぐ黒くなっちまうんですが、その銅を磨いて磨いて、これは金だぞ、大したもんだぞと触れ回したから古代人は喜んだろうと考えられる。若し、今見るように汚くなったものであったら、こんな汚いものと捨てたでしょう。

二番目に、ではその極彩色好きの日本人、ないし巨大好きの日本人、そういうものが何時お茶とかお花のように淡白なもの、或は自然と融合したもの、或は簡素なもの、そういったものに興味を向けたかという問題があります。とに角、そういったものに興味を向けたわけですが、恐らく戦国・鎌倉位いから何かの形で大転換が起きたのでょう。両者処を入れ替えて、徳川時代以後は主流、オーソドックスないし正統は、墨絵の世界、だとか自然に融け込む世界、お茶の簡素、和敬静寂といった美、つまり、わび・さび、が中心となりむしろ民衆の間にですね、芝居、土絵具だとか歌舞伎だとかの絢爛としたものが出てきた。そして能衣裳の絢爛さというのが、丁度その中間に位置している。この辺がおもしろいところだと私は思います。

ではどうしてこうなったかという事を、一寸考えてみたいと思います。恐らく、宋文化の影響だろうと思いますが、その場合の考え方は、日本には昔から種々な文化が入って来たけれど、決して他の国の軍隊が入ってきたことはなかったという事。サンソムという歴史家も指摘していますが、世界の中で、日本は、細々と文化とか帰化人、難民が流入して来るけれども、外国の力は入って来なかった、及んで来なかった世にも珍しい国だという事です。英国人の場合、例えばフランス文化だとか大陸の文化を受け入れるという事は、国家とか民族というものが、その支配を受けるかどうか、力を受けるかどうかということでその力と文化を一緒のものだと考えており、そういう風に他の文化を受け得るように育っていた。だから選択をしてきた。しかし日本人は不思議にも文化というものを、いや北欧が良いとかアメリカのものが良い、或は中国のものが流行りだといって力と関係なしに文化を取り入れようとしている。だから日本人の文化選択は、文明にチャレンジするという，そういう決断を持たず何でも百貨店で買物をするように、これも取入れあれも取入れ、これが流行りだといって取り入れる。ヨーロッパ人にとってみれば、その文化を取入れるという事は、その支配を受けるかどうかの重大決断の問題として取捨選択をしてきたのです。キリスト教を受け入れるようになれば、ローマの勢力下としてやられてしまいますからね。

然し日本もやがて外国の文化を受け入れるという事は、その国の支配を受けるかどうかという問題と匹敵するんだという事を悟るだろうと言って置きますが、皆様も考えていただきたいと思います。私の希望です。つまり、中国文化を受入れるという事は中国の政治を受入れ、アメリカの文化を真似るという事はアメリカの干渉力、影響力を政治的、経済的に受入れるという事です。その決断と共に文化の受入れとか導入の判断が要るのであって、それなしにあれこれと受入れられるものではない。もしそうでない場合には、非常に観念的に文化を考えてゆくせいでしょうか。実際、私達の生活に即しない宙に浮いたものができ上るというか、おかしな事になるんじゃないかと思い

ます。これが一つの問題点です。

さて次は、日本に入ってきた宋文化なんですが、中国というのは、私達が普通常識的に考えている墨絵の世界ではありませんね。向うの正統の絵、これは極彩色の世界です。仏像なども極彩色のゴテ塗りです。ついでにもう一つ考えて欲しいのですが、ギリシアでもそうなんです。私達は、あのミロのヴィーナスを見て、何と大理石の美しさよ、と言っていますが、当のギリシア彫刻は全部色が塗ってあった。その証拠に、アリストファネスの喜劇など読むと、店の奥様が女中を連れて、パルテノンの神殿に詣った時に交わされる言葉が書いてありますが、女中は『奥様、あのアポロ様をご覧下さい。緑の髪の毛、青色の目、赤いホッペに真赤な唇、まるで生きていらっしゃるようでございますわね。』といい、奥様は、『まあ本当に初々しいアポロさまね。』と言っているんですから、あの大理石の上にゴテ塗りの色が施してあったに相違ない。それを見て、古代ギリシアの人々は、ああ立派なヴィーナスの彫刻だとか何とか言ったんであって、その剝げちょろけを見て喜んでいるのは、我々だけだと思います。今あの剝げちょろけを見せたら、昔のギリシア人はびっくりして、こんな気持ち悪いものを拝む気はしない、という事になるんじゃないか、古代とはそういうものなんですね。

元に戻って宋ですが、おもしろいのは、宋の文化を日本に伝えた人、つまり宋から放り出されて日本に移って来たような人は、全部アウトローなんです。このアウトローというのは、日本の若者のようにわざわざ反体制、アウトローではありません。科挙とかその他出世コースに乗ろうとして失敗した人々です。第一、坊さんがそうでしょう。禅宗の偉い人がたくさん来た、といいますが、向うでは、皆あかん奴等です。つまり、向うのお寺は、総て国家が牛耳っていますから、本山末寺の区別はありませんが、お寺、お寺に格式があって、それをどんどん上へ昇がるようになっている。その昇り競争に負けて、憤懣やる方ない連中が、日本へ落ちてきた。或は、科挙試験に落第して、どうにもならないので田舎に籠る。そして悠々たる暮しをするが、余り悠々としていてもおもしろくない。丁度今の日本の若者が「俺は偉くなるなんて毛頭思わなかった。」「ちっとも偉くなりたいとは思わない。」というのと一緒で、実は偉くなれないんです。そこには、「俺はとに角出世なんか望まない。故郷の暖い人情と自然に囲まれて、悠々と暮す方が遙かにいい。」といわざるを得なかった人々がたくさんいますね。千人に一人か万人に一人しか出世できないわけですから。そういう人達がいかにもそれらしい枯れた絵や文章を書いたりして、その影響力が圧倒的に日本に移ってきた。日本でもその影響を受けて、駄目な連中がたくさんいました。誤解していただくと困るんですが、駄目というのは、悪いということではなく、ドロップアウトした人々の事です。そういう人々の褒めたりするものは全部先に述べたようなものを指している。　お茶でもそうでしょう。始めのお茶というのは、佐々木導誉が創ったようなお茶です。中国からやっとお茶が入ってきた。その場合彼がやっていたお茶というのは、大名とか種々の人々を招いて、まず最初にお茶を出す。これは前菜というのですか。それからは大宴会で、くじ引きの引出物を配ったりの大騒ぎの後別れるわけです。ここではお茶は全く初めのものでしかない。それが段々お茶だけが主流となり、お茶だけが最後になってしまったのはどういう理由でしょうか。この訳は種々ありますが、堺の町民とか、その辺の例をひとつあげてみたいと思います。

堺といえば、ヨーロッパではベネツィアに匹敵する。つまり近代化が起る前に、まず町人達が自分の周りに城を築き、京都の昔の貴族がやったように、半武士という番犬を雇って番をさせ、自分達の世界だけは平和を保った。堺の町に入って来れば、大名であろうと、どんな偉い人であろうと武装禁止で、その代り町に入れば平和になれる。そういう法律が施行されていたんです。ヨーロッパの場合は、その町人ないし市民の力が強くなって、町の中だけ、というのを周辺の平和に迄、やがて地域の平和に迄拡げてナントフィーゼまで持ってゆき、そして国を戦乱時代から統一国家へ持ってゆく力があった。ところが日本の場合は逆さまで、そこ迄は良かったんだが、堺の場合信長が攻撃を申し渡すと途端に戦いもしないで降伏してしまった。そして信長の町奉行を受入れ、次に税金を支払うことになって完全に信長の支配に屈服してしまった。ここに於て日本のブルジョアの自治は崩壊したわけですが、そうすると、町奉行が大小を腰に威張って入ってきても今迄のように、町に入ったら、まず武装解除などとは言えなくなった。そこで自分の家の中に入った時は刀をはずせと小さく出た。そしてそれも段々にできなくなると、今度はお茶室という極限の部屋を作って、此の茶室へお入りになる時は、大小を腰から降し、全く平和な形になって下さい。そうしてこそ初めてお茶を出しましょう。と最後のところで辛うじて踏み止まった。ただそこで踏み止まったんではおもしろくないので、これが最上なのだといわない限り、お前は逃げて逃げて、そこしか居られないのかと言われるとプライドに関わりますから、利休は急転直下この四帖半こそ最高の世界だと居直った。そして居直った後に、秀吉にお前より俺の方が偉いんだ、精神的には深いんだと言い続けた為とうとう秀吉が怒って利休をちょん切って

NO4

しまった。それだけの事であって、どちらが偉いのかわかりません。

まあそういう形で簡素、簡素といってきた日本の簡素は、従って多少引かれものの小唄だと思うんです。贅沢ができなくなった、威張られなくなった、その為に簡素に逃げたと思います。だから、日本の簡素の美お茶の美は、総て貧乏な美です。その代り、これが貴重だ、精神的に貴重だという事をいいだしたんだと思います。だから悪いといっているんじゃありません。貧乏の極致、裏の極致だと思うのです。そして、それが主導となったのです。

例えば墨絵が大変立派だと言われていますが、私は日本のドロップアウトが中国のドロップアウトと共感したと考えます。ただし、日本の偉い人は貧乏な為にその日本のドロップアウトを中国の正統だと思った。そこに、わび、さび、という裏文化が発達してきた。それから又日本では、すべて裏が正しい。裏と表がある。正統な世界、オーソドックスな世界、表通りの世界があればもう一方に裏の世界があると分けました。

ヨーロッパの世界（中国も恐らくそうだろうと思いますが）に、パブリックとプライベートという形がありますね。これは美意識の根底に遡る問題ですが、その場合に、パブリックな生活と、プライベートな生活があまり分かれていない。のみならず、プライベートな生活はそこから文化を生み出さないという感じになっている。例えばヨーロッパでは、大体半分はサロンが街頭ですね。案内も請わずに誰がが入ってきて、喋っても良ろしい。イタリアなんかへ行くと、階下に応接間がある。そこへ入って喋っている人が御主人かと思ったら、お客同士だったという場合もある。主人は二階のプライベートルームに居て、出てこない。つまり、半分は自分や家族のもので、半分は他が案内を請わずに入ってきても良い。そんな世界ですね。プライベートな世界それ自体からはなんにも生まれない。そこへパブリックなものが入ってきますと、そこからデザインでも何でもまともに考えてゆくことになる。

プライベートは外部から遮断された世界ですから、なかなか良いものができない。18世紀位までの王や貴族の寝台など、どうしてあれ程デザイン的にも考えられ上等かというと、これは半分パブリックだからです。フランスの王様など、常に監視付の生活です。果してその人が、ルイ何世の子であるかどうかなどと、王位にまつわるのであれば、精密を極めた証明書が要るんですから、プライベートだったら本当に意味がないですね。そういうもんですよ。ところが日本の場合は、このプライベートとパブリックの関係というものはない。つまりそういう観念がありません。自分達はパブリックなものとの一員であるという事が、言葉の意味ではわかっていても、本当はどうしても解からない。皆様の家の応接間で隣人かが2.3人入ってきて、喋っているのが普通だというようなところまで行かなければ、我々には解らないでしょう。我々の生活がパブリックなものに繋がっている、ということが解らないから、従って、パブリックが解らないという事になります。

そこで日本の文化を表と裏に分けて、パブリックとプライベート或はオーソドックスとオーソドックスでないともいえますが。私達の観念はそこで二つ出来上っているという事ですね。つまり表の文化と裏の文化、表文化用のデザインと裏文化用のデザイン、等々です。但し、日本人の考え方は少なくとも茶以来根本的に変化を来たしたのは、戦国時代を経て宋文化の裏文化を正面に据えたからです。表通りは奇麗な着物、正規の服装をした人が歩いている、自動車が走っている。街路樹がある、秩序があり平和がある。しかしその代り嘘が走っているという考え方が日本人の根本的な考え方にある。表面だけでは嘘だという立場です。この観念は、ヨーロッパには絶対にありません。「バス通り裏」という言葉がTVにありましたが、バス通り裏、舗装されていないドブ板のかかっている通り。そこには普段着のままの人間の汗の臭いが漂っている。だがそこには真実が走っている。人々の肌がそこで触合い、そこで初めて人々が本当に接触できる。というこれが日本人の考え方です。これを端的にデザインとか、建築で表わした例が裏文化の粋といわれる京都の桂離宮だと思います。これは智仁親王という人が、あの主体をつくったのですが、彼は秀吉時代にはパブリックな行事に参画して、天皇の供をしたり聚楽第にお供をしたり、形式的には非常に栄光の座を占めていた。ところが家康になって以後、一切そういうパブリックなところから放り出され全くの個人生活になってしまった。英雄の志がありなかなか偉い人ですから、そこで非常に憤激して憤懣やる方なく、よしそれならば一切公の場には出ないぞ、パブリックなところは一切拒否してプライベートライフだけを楽しんでやる、と僻みに僻みを重ねてパブリックな行事の為には絶対に役立たない離宮を造って見せたのが桂離宮ということです。多勢の人が一緒に訪れたらもうどうにもならない。宴会もできない。しかしそういう裏に徹した離宮を造ってみせた。これが日本の美でありましょう。その頃表文化の権勢と美を絢爛豪華たるものに造り上げたのが、日光東照宮です。これを褒めて桂離宮を褒めないと、インテリでないという変な伝統ができて、我々もやむを得ず桂離宮を褒めているんです。が、そのように裏が本物だという事でありましょう。

確かに私達は裏が好きです。奇麗過ぎる処は落ち着かない。どこかで飲み潰れられる場合は必ず汚い、お母ちゃ

んの近くに帰ったような、安心してひっくり返れる場所で、奇麗な場所は危くてしょうがない。というそんなものなんですが、問題はその場合の、本当のどぶ板を踏んでというところの形態表現です。船板塀に見越の松、これは良いんですが、その場合先述の意味で桂離宮になっているんじゃないかという気がいたします。つまり私達は、殊にデザイナーの方に申し上げたい事は、表文化は嘘だと思っている。だから人間の実生活に合っても合わなくても、とに角、形の絢爛さを見せかける。それで良ろしいという事になって、そこで永久に住むわけじゃなし憩えるわけでもない。ただ豪華な表文化的なものを味わったら良いという事、これも一つの道だと思います。がしかし私たちが、うっかりそれに徹すると、嘘に徹するということになる。

よく、万博のデザイナーが、進歩派のデザイナーから、ぼろくそに言われたのは、そうでしょう、つまり体制に奉仕する奴だという形で攻撃されたのは、我々の世界の中に、どうも表文化は形式とそれから秩序と平和と、権力闘争なんかあるけれど、それは形だけで血は通っていないものだ。そういう根本観念がありますから、そのような言い方をする。だから岡本太郎氏が怒ったわけですね。

ところがそれは裏なんです。我々が良く考えてみると、例えば生活デザインで本当に生活に即したものを造っているかというと、裏の文化を本物だという観念がありますから、それがオーソドックスだという観念で、どうも桂離宮になってしまう。桂離宮に住んだら、寒いし、不便なところだと思いますが、あれも何か気取りですね。俺は本物だと気取っている。そういう気取りですね。あそこは生活の場所としては大変困ると思いますが、そんな事もうまく考え、考え抜いて造った日本文化の粋というような事を、色んな歴史家とか学者とかがいっていますが、本人は住まないんですから気楽な話で、住みもしないで住んだら良いと書くんですから無茶な話です。実際住めたもんじゃない。気取りがあります。あれは、生活の世界ではないでしょう。矢張り俺は裏を気取って、というところがあります。お茶がそうでしょう。茶室というのは、私は虚構の世界だと思います。30分かそこいらなら辛抱できる二畳の間に住むことはできない。その住めない世界に、無理に住むということは、一つの芸としては立派なものだと思いますが、生活文化が離れていると思います。となれば日本で一番真実を内蔵している筈の裏文化の粋だといわれているお茶の世界は、嘘の世界ではないのでしょうか。一種の芝居で舞台の上の粋気取りだったと思います。わび・さびが、気取りだけで、生活にわび・さびが、根を張っていないんじゃないでしょうか。だから悪いというのではなく、日本では表と裏とに奇麗にわかれ、表を見ている目と、自分の内面を見詰る目、その各々、二つに分かれていった。その長所としては、内面を見詰る目を持っている事なんですが、(これは皆デザイナーの方々ももっている。)しかし良く考えてみると、その内面を見詰る目というのは300年以来の伝統によって、衒いになっている。わび、さび、とかいった総べてが、衒いになっている。つまり最悪の意味での桂離宮になっているという事です。そんな衒いのものに座らされたり、注視させられたりしている我々こそいい迷惑だということになります。

生活というものと、我々本来は、表と裏という形で実生活に即するものの方向に向いたいくせに、そこに妙な衒いというものがでてきて、それによって今日も振りまわされている。表の方はまだ一寸無理で、我々は嘘というものを認めるような世界でばかり生きてきましたから、表の方は、日本ではまだその伝統がなさすぎ、これからの世界ではないかと思います。ヨーロッパはその表世界だけに立派なものを造ってきましたから、そこで伝統を持っている。

まとめますと、日本では表世界にはこれからの世界だけど伝統がない。裏世界には独自の大変素晴しい伝統があるんだし、実生活に即した、全く生きた文化を本当に私達が創り出せそうなものだけれども、そこに妙な衒いがあって、固い形になり、実生活から離れているんじゃないだろうか。そういうものを、どのように克服してゆかれるか、或はどのように体当りしてゆかれるのか、というのが私から見た今日のインテリアデザイナーの方の課題ではないかと思います。大変悪口を申しまして失礼ですが、どう考えても私は、現在の方はインテリアデザイナーではなく、インテリアデコレーターだろうと思います。それは簡素とか何とかという事ではなく、少し違った意味で、実生活と離れているんじゃないか。そういう感じがいたします。これは私の感じだけで、暴言だったらお許し願いたいと思います。私の話をこの辺で終えたいと思います。

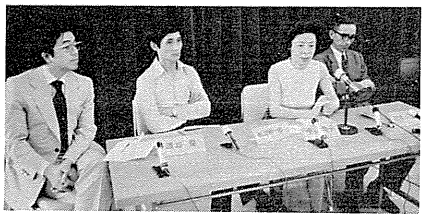
## 不特定多数のための住居

㈱根津建築事務所 代表　根津　耕一郎

私共が毎日つくって居る、いわゆる建築というものは特定な方に奉仕する建物ということが主眼になってます。然し、これからの建築の分野は、不特定多数というものを対象とした建物、いわゆるプレハブの住宅であり、家具といったものも、いわゆる既製家具の分野、不特定多数というものを大きな対象として生産してゆくという従来の考えとは随分違ったものの考え方に成り立って来るわけであります。

それで、特に一つ一つ個別生産する様

NO 6



●根津　耕一郎

な形の建築という事では、その中に可成り職人さんの仕事だとか、建築家の個性だとかいうものが積み重ねられ、精神性の蓄積というものが自ずから出て来るわけです。そこに日本人、本来の一つの精神性、風土から何か非常に安心感を覚え、その中に住まえるという観念が生まれて来るわけですが、これから寧ろ我々がつくらねばならぬと思う空間は、不特定多数を対象とした空間であると思います。

それに対しては、「なんだ、プレハブか」という様なことで、そういう空間をバカにしたり、又それに対して精神性の貧困を嘆くなど、種々拒否反応を示す人さえあるわけですが、実際建築の皆さんにも矢張り、そういったエモーショナルな部分と、非常にエンジニアリングという事が重要になった要素とがあるわけでして、特に不特定多数を対象とした建物では、エンジニアリングというものが非常に重要になって来ます。然し其のエンジニアリングというものは、日本の従来の自由空間での仕来りなどが有って、現在の一般大衆に対してはもっともらしくその上にオブラートを被せ、要らない柱をみせかけたり、床の間を付けたりという風にして、恐る恐る差し出し、買って頂くというのが今のプレハブリケーションの状況ではないかと思います。

昨年、アメリカのゼネラルエレクトリックの中の、プレハブ工場を観に行き、そこで日本の住宅とアメリカの住観念の間に非常に大きな差を見出したというか、大変異質な家の造り方を目前にして驚いたわけであります。

日本の場合だと、自分の家を造ってもらうとなれば、朝、弁当を持った大工、職人さんといった人が来て、昼にはお茶を飲んで、今日はこれだけ出来た。又明日はやってくれるという様な一つの繰返しのプロセスに意味合を含めて、家を造るという事に何か愛着を感じる様だと思いますが、此のアップルバレーの工場では、例えば床の場合一つの部屋の大きさの床パネルがそのまゝ機械から出て来ると、丁度輪転機から新聞紙が出て来る様に床の仕上げ材が出て来て流れ作業で全部貼られてゆく。又壁にしても、プラスターの繊維板がスレート板の工場の様にぶら下って出て来て床と交わりくっついてゆく。そして又……という風にその中身というものが非常にプラクチカルに出来ているわけです。日本人が大切にする、壁のテクスチェアだとかそういうものでなくて、壁の断熱係数がいくら床の磨耗度がいくら、厚みが何、という様な物理的性状そのものを非常に大切にしているけれども、造り方そのものには日本人のいう精神性或は人間性なんて恐らくありません。日本でいえばオモチャや物置などを作る工場の生産システムと何等変わらない。

又、エアコンディショニングをする空調の設備に致しましても、何かボール紙を曲げて作った様な、全くチャチだと一笑に付されてしまう様な構造のものかも知れませんが、　それがプラクチカルに、実際に使っていって差し支えないという形のものに出来上ってゆく点では、一般のそれを買う人は文句をつけない。そんな大衆の受取り方の問題が非常に違って来ております。

然し、そういった姿のものが、私、人間の住まいだとも思いませんが、そこで問題となって来るのが、日本にそういう問題を持ち帰って、日本のプレハブリケーションというものを、どういう風に考えるかという場合であります。私共が実際に開発しているアメリカから出て来た、ツーバイ法、2吋の規格にそって、その倍、倍数をもってパネルを造り組立て行こうという工程ですが、その過程でも矢張り日本の生活、風習、或は伝統、そういうものに対してどうしても抜け切れない様な部分があるわけです。例えば玄関の土間との上り方、風呂場と便所の分離の仕方、床の間がなければいけないという考え方、部屋の中に矢張り柱、長押といったものが付加されていなければ商品としては認められないという様な考え方、その他幾らでもありますが、実際のエンジニアリングから言うと、そそういうものは、多くの経費をそれ等にかけてしまい、本当の意味での住宅の質を上げ得ない結果となっていて、所謂ナイスルッキングだけにとゞまったものが売られてゆくという事が実際に行われて居るわけです。

では私達がそれ等の問題をどう解決して行かねばならぬかという事ですがその場合先ず考えてみたい一つは、日本人の考え方が大陸の人たちに比べ、俗に云うみみっちさを持っていると云う点です。歴史的にものが少く、資源に乏しいという考え方。車にしてもルッキングは非常に良いが、本格的な車と比べれば何となくブリキ細工的要素が残って居る事に表われます。これは日本人が攻められるべき問題ではなくて、矢張り資源というものが乏しいから、日本人自体がそういう状態に追い込まれて、それに精神性を付加して自己満足することによって資源の乏しさを補って来たというのが、まあ日本人のいわゆる生活ではなかったかと思います。然し、そうした貧しさの故に、新しい技術が大きく開発され、マスプロされ新しい考えのものが大量に供給されて来ると、どれを選んでいいのか、どうすれば良いのか、それをコントロールする考え方というものに中心を失って、与えられたものを甘んじて受ける守備の姿勢で一般大衆が受止めると云う事になるわけです。

だから、私は妙なインテリアデザインだとかいった、ごまかしを止めてしまって、全くスケアーな空間を与え、その中で皆が一度考えてみるという具合に、唯しその空間自体は非常に物理的な環境だとか、建築的なクオリティの高い質のものに持って行くという努

力をしなければならない。又そうものをどんなエネルギーでもって改めて行かねばならないのか、今の時代がいわゆる徳川時代からの連続ではなくて、一つのエモーショナルな変換期にあるという点で、大きな意味での物に対する考え方の変換が必要ではないかと思って居ります。

然しそういった中に於いてどう云いった精神性を獲得してゆくかと云う事になると、例えば住宅なり、広い意味での耐久消費財というものが全く使い捨ての美徳をへて、資材の不足に対する考慮を払う時代になりつつある時、今后どの様に部品を供給したり、いわゆるリペアして行かねばならぬか、その辺りに人間同士が協力してゆかねばならぬ問題があると思います。その辺りを、我々としては自由空間の中に於いて特に不特定多数のための住居ということを真剣に考えて行き度いと思うのです。

然し、その手始めは、むしろ荒療治で、全く大衆に対して背を向けた形に見える様な、残酷なものを造ってこそ始めて今の時代のデザインの一つの流れを堰止め、或は回転を変えるという事が出来るのではないかという意味で一つの革命が私自身はほしい様に思って居ります。

## 住居の質を考える

大阪市大教授　白木　小三郎

最近、人々の生活にかゝわる問題、ことに住宅問題では、今迄の様に量がどうのという事ではなく、質がどうのという方向へと問題の重心が変って参りました。

そこで、住宅の質というのは非常に種々な問題がある言葉ですけれども、今迄は単に住宅が、終戦後絶対不足の上から、とに角造れば良い、それに出来るだけマスプロの法式で団地とかアパートの様な、しかも不燃性であれば非常に効率が良いという風であったわけです。そういう条件の中で大体四半世紀が済みまして、今日、数字上では量的に相当充足させましたが現実に住宅とか、或は生活全体に関して、本当の充足感を日本人が味合って居るかと言えば決してそうではないわけです。

それは、たゞ造るだけで、本当の意味での使う側からの問題の受止め方がなく、唯、造れば良いという所謂供給者側からの問題だけが、需要者のなかに大きなヒズミを今日に残して居るからだと思います。

然らば、住宅の質とはどういう問題なのか。例えばアパートの様な2面がコンクリートで囲まれた住宅の中で、本当の意味の家庭的やすらぎは得られないであろうし、そこに住む家族が本来的な人間の触れ合いの出来る住環境はどうかという様な問題について相当考える必要があると思います。2DKとか2LDKという言葉があります。又、リビング・ダイニングという言葉もあります。リビング・ダイニングというのは日本でいうと昔の囲炉裏ばたです。日本人の過去の生活の中では、あの囲炉裏ばたは食事と調理をする処であり、しかも其処で家族がみな集って人間的な触れ合いを持ち得た場所です。何もLDKとかダイニング・キッチンだとかの言葉はなくとも日本にはこういう処が有ったわけです。それを終戦後の住宅の形のなかでLDKとかダイニング・キッチンとかの言葉に置き替え、日本人の本当の生活の形式のなかに触れ合おうとしなかったところに問題があると思います。

我々が、住宅の室内を考える場合にもっと人間的な触れ合いの豊かさを求め様とするならダイニング・キッチンというもののなかには昔の囲炉裏ばたに於ける状況が蘇って来るのではないか、という風な気がするわけです。

インテリア・デザインというのは、人間の生活の場を、其処に住まわれる人間の、家族の、家庭の、人間的触れ合いをつくる事を第一義とするものでなければならないと思います。

今日、住宅を含めた生活上の種々な混乱を見受けますが、これは、今日と明日とを直結するところから来る混乱であります。

我々の明日というのは、昨日、今日につながった明日であります。従って我々は歴史的な経過の中で此の問題をどう処理して来たかという事に考えの目を向ける事で解決を導かねばならないと思います。

それから最後に技術の問題でありますが、我々の住宅に関して申しますと我々の本当に豊かな、人間らしい生活を行う場としてつくるのが目的なので、それに奉仕する、それを手段づけてくるのが技術であるという事を申し上げておきます。

## 住まいの秩序を望みます

中山文甫会　中　山　尚　子

私は、アパート2ツと小さなアトリエを六甲に持ったりで、東京とか大阪を行ったり来たりの生活ですが、そこで使っている家具が殆ど外国のものなんです。フィンランドの家具とか、西ドイツ、或はアメリカのノルの事務机といった具合で、特に私は北欧の家具が好きなんですが、何故かといえば、それ迄日本のものを使っていたのが或る時たまたまそれ等の家具を使い始めると、何とも使い心地が日本のそれと違うのです。アスコ社のものなど使っていて考えますに、何か人間の主体というか動作というか、人間の姿勢の様なものに非常に密着している。又研究され尽くして造られて居る。材質を非常に良くこなして居る事など思い当ります。

最近、日本の家具も見た目は綺麗で外国のものと変らない様なものがあるにも拘らず座り心地はどうも違う。そ

NO 8

●白木　小三郎

●中山　尚子

●渡辺　優

して大変気になるのは日本の家具の装飾過多という事です。それも非常に悪い装飾です。私など生花ですから、室内に飾る場合非常に環境に左右されるものなんですが、この装飾過多の集りには困ります。又、近頃、量産家具が増えたり致しますと昔ながらの、職人さん等というのが少いとか需要が少いという事で木の性質、材質が良く識られた上で作られた良い物が目に触れなかったりするわけで、最近の合板などで作られたものは、余りその性質が活かされてないのが多いのではないかしらという風に思います。

そんな事で、私は北欧辺りの家具を好んで使って居るといえましょう。

次に話を変えますが、先日、生花の或る会議がありまして城崎まで参りました。その時泊りましたのが近頃温泉地であちこちに建ってる、外見いかにも都会的でモダーンな7階建てのホテルなんですが、私が其処で見たのは何かちぐはぐな或る姿であったといって良いと思います。屋内に入るとロビーの先にクラシックな壁画があって、噴水などがあり下は絨氈が敷き詰められているけれども、矢張りクツは脱いで上り、長い廊下をスリッパで歩いてゆくわけです。そうして部屋にたどり着いて入ると天井や照明が非常に凝ってある。その部屋と、このデザインとがどうして関係あるのかその必然性が全く解らない。又部屋の真中に大きな柱がベッド横に立ってたりで、不思議なことだなあと思いながら見廻したんですけれど、窓は全部、今様のガラスのアルミサッシュ。部屋の冷房はしてあるけれども換気孔らしきものはない。で、窓を開けますと外側は虫が一ぱいでガラスにくもの巣が張ってたりするんですね。窓を開けないから非常に密封された景観をうかゞうだけ、それに宿の女中さんというのが昔ながらの女中さん、掃除もすれば食事も運ぶ。それに夫々の部屋掛りの人がいましたが多数のお客相手で大忙しと云う具合。なにかしら私はそこに行きまして、遊びの場所としての設計をされた建物であったわけですけれども……。　何かちぐはぐで何かおかしい感じです。

最近、アパートにせよ公団のそれにしても殆ど鉄の扉です。何か監獄を連想しないでもなく、そういう意味から申しますと、何か本当に心から考えてデザインされているのかどうかと、建物やその中のデザインに関して疑問を持つ事が非常に多いわけであります。

つまり、昔から持って居た日本の家屋が今でも一番いゝというわけではありませんが、もう少し日本の風土、生活の条件に合ったものが考えられる、というより造られて行ってほしいという風に考えます。

日本人というのは割合勘とか心とかいう風な事を尊重し、そういうものが頼りになって種々なものが出来てくる面があり、理論を煮詰めて、突詰めてものを製作する面が少ないという風に考えますので、我々の生活の周辺によくある事ですが、何か外国の物を取入れる場合、それ等の背後につくられて来た種々なヨーロッパでの暮し向きとか長年かかってつくられてきた思想といったものが、今、日本では非常に模倣されたものだけが多くて本当に日本人の暮し向き或は日本の風土に密着したものとして造られているかどうか、非常に疑問に思っている次第なんです。

## 試行錯誤

協会副理事長　渡　辺　　優

現在、日本の私等、生活の中には種々な問題点がある様に思います。臭い話で恐縮ですが、便所の話しで考えてみますと、先ず昔は水洗ではなしに厠でした。それこそ蚊に喰われながら蹲んでいたという様な時代、自然の中で、蹲んでそれを自然の川に流すという様な、これは確かに或る意味ではシステムの一つの纏まりというか、秩序があったと思いますし、そういう時代があった。然し、それが良き時代だったからといって、果して今それに又、戻ることが出来るだろうか？という事ですね。その次の時代には汲取式というものが出来て来た。そしてその段階ではバキュームカーみたいなものが出現するという不思議な時代に入って来たわけですが、そのバキュームカーみたいな不思議な時代というのが実は、現在そのものの姿ではないかと思うわけです。つまり、其処には秩序としての一貫性が無いという様な問題。或は、その様な中でのデザイン上の様々な問題。生活者そのものが持つところの、生活する側としての問題点という様に様々な形でこれはもう捕え処の無い状態にある。その混乱状態の中に実は置かれて居るのが今の私達デザイナーの立場でもあるのだという風な気が致します。

では一体どうすれば良いのかという事ですが、私等としては、矢張りこの様な中から、新しい何等かの秩序、新しいシステムといったものを作って行かねばならないだろうという一つの見方が必要だと思います。

デザイナーとして、それ等混乱自体そのものを見詰めると云う事、此処で混乱をごまかし、なんとなく綺麗事に終らせるといった様な事は一番避けなければいけない。今の時代では、とに角カッコ良いものを造る前に、混乱状態そのものを見極め、見詰める事が、私達デザイナーの今の役割りといゝますか、やらねばならぬ事ではないかと思います。従って、その中では様々な試行錯誤もあるでしょう。御覧いたゞいた今回の作品展の中でもいろんな意味で暗中模索しているものが、其処にそのまゝ現われて来ている部分があると思いますが、これは当然、必ずしも表面的な綺麗事のみで事を終らせようとしていない姿の結果だと一言いわせていたゞき度いと思います。

# スペイン・トルコ・マレーシア・中南米——スケッチ

■<インテリアイメージ '73>展を終え、関西では期せずして数名の会員が海外に旅立った。そして各々持帰った話題も、欧米中心のデザイン視察録とはならず、奇妙に満ちた土の臭いであったのも耳を貸すには、又楽しい。慌しい今日此頃、此処に其の一端を載せる所以でもある。

## グラナダの靴磨き

森岡　正

アルファンブラの麓、古い街並みの迷路のような路地を歩いていると思いがけない広場に出る。　スパニッシュ独特のひねり鉄細工の美しい面格子扉に、原色の花と深い緑の庭園が現われ目を愉しませてくれる。燃え上るように伸び上った糸杉の樹立ちと朝日を受けて輝く真白なアーチの壁、スペイン瓦の屋根が複雑に重なりあって織りなす奇妙なバランスをもった風景……etc
歩き疲れてホテルに向う。華やかで賑やかな本通りを曲ったところで靴磨きのオヤジサンに声をかけられた。　少々薄気味悪く、又磨く必要もないように思えたので断ってホテルに入る。
ロビー横のカフェーで椅子にすわり、出発迄のひと時を休んでいると、先刻の靴磨きのオヤジサンが商売道具一式を入れた小箱をさげて入ってくる、
客の一人が声をかけると素早くその足もとにしゃがんで店開き、手早く靴を磨き始めた。客はカウンターに横向きに肘をついてコーヒをすすっている。
その手際は素晴らしい、全く見事なものである。その手付きに見ほれている内に美しく仕上った。ズボンのポケットから小銭を与えて客は立ち去った。
オヤジサンは道具を片づけながら次の客を探してあたりをキョロキョロ見渡す、ふと私の視線と合うとニコリと笑った。先刻道で合ったのを覚えているのかもしれない。こちらにやって来た。
私は椅子にすわったまま片方の足を少し前に出した。大きくうなずいてたちまち店開き、私の靴を磨き始めた。時々顔を上げて私をチラッチラッと見る。
少々浅黒くひきしまった顔、ガッシリとした体つきは多分にサラセンかムーア人の血を継いでいるような気がする。
壮麗なアルファンブラ宮殿はこのオヤジサンの祖先達が造ったものなのか。

## 私のトルコ

山口道夫

私とトルコは劇的な対面をし、私は感激の連続で上気し、古代の詩人の歌を想い美酒を飲み、精力的に偉大な文化の遺産に酔いながら歩く。出合いは仲々好調であった。空から行ったのが少し、しゃくではあったけど、本当にアンカラの灯が見えてきた、トルコに私は来たのである。

広い道路と乾式構造建築の並ぶ現代都市アンカラを出発するにあたり、昔風に旅の幸運を祈って動き始めた乗物に見送りの人が土瓶で湯をそそぐ、我等が乗物は馬車ならぬ黒い大型ベンツ一路イスパルタに向って南下開始。
ゆっくり実にゆっくりと地平線に落ちる夕陽に向って道が一本どこ迄ものび、空の色が見事に変る中を我が乗物は、たくましいベテラントルコ人の運ちゃんが時速180㎞で飛ばしてくれる。
何もない何もないのである。あるのはゆるやかな丘と道路のみ、それも見えなくなった時、細い月がひくくのぼって始めて風景に変化が出来た。リヤーウインドの空を見ると、どこ迄も暗く美しい青い空一面に星が正に、ぎっしりと空を覆っていた。肉眼で星がこんなに見える事、大中小、極小の星がこんなにある事にただおどろき首が痛くなる迄じいーっと見つめていた。それにしてもトルコという所には星がよくもあんなにと、今でも想う、その時に古代天文学や古い詩も何も思わず、ただぼおーっと見て居れたという事は何と幸せな事でしょう。

朝とつぜんに、禿げた丘に太陽が照り付け、岩に苔のようにへばり付いて見える背の低い灌木と強いコントラストを見せる岩や土を、超広角な視野で眼前に、いやに強烈に見せ付けられた。羊飼いに追われた羊の群れが、土けむりを上げ、首に付けた鈴の音のかたまりが通って行くと、所々にまばらに立つ木の影のつくる輪郭通りに、きっちりと羊や牛が寝そべって日光をさけていた。道には車が全く通らず、たまに女達がロバや馬でゆったりと通り過ぎる。村では男達が屋外の喫茶店？で茶をすすりながら休んでいる。一日中朝から夜中迄。一日一本通るのだと彼等が自慢した列車、古い汽車が小さな黒いマッチ棒を見えない糸で静かに引かれる様に、なめらかにゆるやかに遠くを通る。陽の照り付ける広野の中を。
数千年の歴史の物語りに取りかこまれて人々が、たぶん昔ながらに暮していたのだろう。そんな中を私は何か気違いじみたスピードと仕事のスケジュールをこなして、中部トルコを通過して来たようである。

## マレーシア

並川拓史

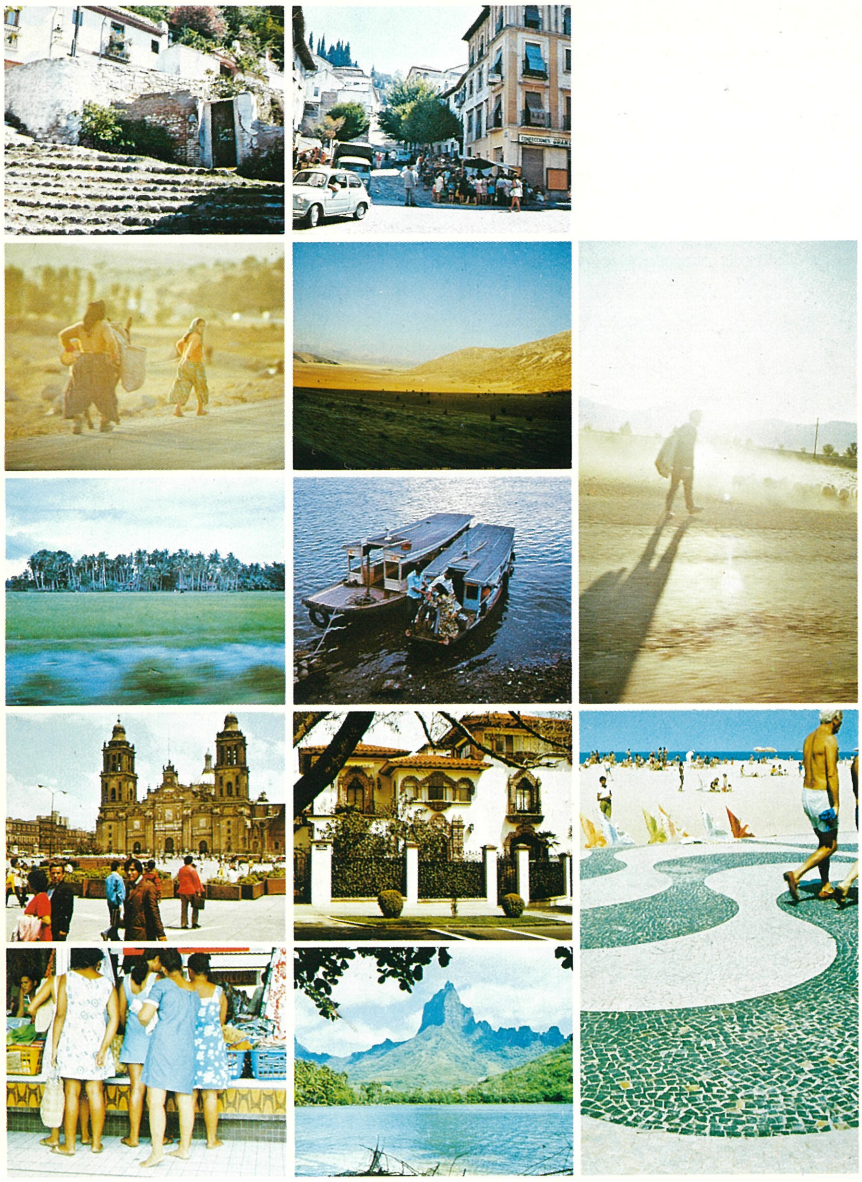
主都クアランプールは公園都市で、レークガーデンはエキゾチックな熱帯の花や緑一面の芝で、太陽とみどりにつつまれ、街は新しいものと、古いものマレー・インド・中国人など、回教寺院・ヒンズ寺院・中国寺院、中国のチョンサム・インドのサリー・マレーのサロンなどさまざまなものを、複合国家の典型的な都市像をみることができた。都心から約40分位、カチャングの町までの途上、売店とは名ばかりのくだもの店に立寄った。目的地で調査をすませ約2時間後、その小屋には既に人影もない。聞くところによると、その日の生活費を得れば仕事は終りらしい。午後3時前であった。わが国とは違いそれは日常茶飯事としていかにも大陸的・より人間的だと思われた。
マレーシアの北に位置する、テンガヌ州へは、街や、ジャングルを幾度もくり返し通りぬけクアラ・テンガヌ市へ向う、途中、スコールに会ったが相当な雨量と風でちょっとした台風なみの

森岡▶

山口▶

並川▶

尾畑▶



ものである。人や放牛などが、あわてた様子もなく、ズブぬれの姿は気の毒なように思えたが、当地では自然の背景であると聞いた。

当地で宿泊した、ビレッヂモーテルのフロントとウエイトレスはいずれも女性で、彼女たちのコスチュームは、すべてバティック(手染)である。マレーシアでは通常オフィシャルな場で、この種のバティックウエアーをフォーマルなものとして着用されている。モーテル内装のインテリアテキスタイルもすべてバティックによって施されていた。民族の伝統的なものとして大切にされている。

## 中南米

尾　畑　祐　司

8月19日から9月4日にかけて、日本優良家具販売協同組合ージェフサ　のメンバー店12社によって企画された中南米視察団に参加し、カナダ・メキシコ・ブラジル・ペルー・ポリネシアをまわる。

■メキシコシティはソカロ広場を中心とする古い街でアメリカ大陸最大最古のカトリック中央寺院やモザイクで飾られたスペイン風の石の建物が並んで落着いた雰囲気をつくっている。一方、高級住宅街には旧市内にある古く黒ずんだ建物とは比較にならない立派なコロニアルスタイルのものが並んでいる。レフォルマやインスルヘンテス通りのモダンな近代建築も、工事の方法は、まことに粗末なもので、しかもどの建物を見ても地盤がよくないのか左右、どちらかに倒れていたのには驚いた。

■リオ・デ・ジャネイロは1960年にブラジリアが建設されるまでは、首都であったことは云うまでもないが、そのリオを知るには「カーニバル」を見なければ…と現地の若原氏が云われたように、確かに私たちが見たリオは冬でコパカバーナの海岸も静かで、波の模様をモザイクであしらった散歩道も寂しく見えた。

■リマはスペイン植民地文化の名残りをのこす古い寺院や、白い壁の建物が沢山あり、その中に新しい建物が、しっくりととけあっていた。それらはサンマルチン広場を中心に広がっている。ポンコツのバスやタクシーがゴトゴト走っていく。時にはバスを一人で押す人がいたりした。ポリスはさすがに立派、赤い服の女性が白い壁の前を通る。

■フランス領ポリネシアの中心がタヒチ島。ゴーギャンの絵で見る「南国の楽園」を思いながら、首都パプーテについたが、海はセカンドハウスでしめられ、道は車が走り回っていてすっかりイメージを変えてしまっている。ハダシで歩く女性だけが何かそれらしいものを感じさせたくらい。しかし船で1時間半、空路と云ってもセスナ機程度のもので約8分ぐらいの距離にあるモーレア島で野性の魅力を知った。海岸は波打ちぎわまで白い砂、青くすきとおった海の水・珊瑚礁・熱帯魚、ここではじめて南国の楽園と云う雰囲気を感じた。

## 明るい明日の発見を
## ー理事選挙の意義をさぐるー

今日、とくに積極的な情報らしきに接しないこの頃。ここに、この秋以降におこなわれる理事選挙について一考してみたい。

いわゆる、より積極的な工作は如何。たとえば、自せん・他せんを問わない立候補制とか、現理事からのすいせん制など。そして、真に明日の協会が対社会にひとつの職能団体として、どう積極的な行動指針を打ちたててゆくべきかを思考する人材を……と。

そして、各事業年度の行動指針なりスローガンなどを設定するとか。そして、事業の幅も、①建議建策　②各種コンペの企画立案と実施　③業績の表彰　④各種規格・規準などの作成　⑤見学会・展示会・報告会・研修会の開催　⑥図書類の刊行　⑦夏期大学の開講など。これらえの柔軟な動きをもつなどの組織づくりも、また一考か。

本年4月、アメリカでは、「デザインで不況がのり切れるか」とレーモンド・ローイに意見を求めて以来40年ぶりに、ニクソン大統領の要請により、市民にとって、より便利で気持ちのいいデザインはいかにあるべきかの統一的な研究と答申への作業がおこなわれている。（JID61号掲載参照）

ひとたび、建築界をみると、設監業法をめくる建築家協会、東京建築士会対全国建築士事務所連合会の対立混迷を契機として、建築士法改正の機運はいよいよ高まってきている。いわゆる、建築士とは何かの原点にたちかえって社会的なレベルで問いなおそう……と。

今や、経済成長と工業化時代を背景にデザインの喜びを無邪気にうたいあげていた社会のおもかげは色あせ、人間的なハダ合いへの志向が謳歌され始めたといえよう。

これからの協会の在り方について、会員相互の意見を開陳し、その意志疎通とより明るい明日の発見こそ会員共通の使命となってきているのではないだろうか。　　東京支部　尾上記

## 色彩とデザイン

●「最近のヨーロッパの色彩について」と題する講演会を9月21日㈮2：00 P.M.よりエデップスハウス（名古屋・中栄）に於て、中部デザイン協会及びエデップス建築資材研究会との共催で開催した。

講師は㈳日本流行色協会常任理事で前千葉大教授の山崎幸雄氏。

当日は定員40名のところ、是非にとの熱心な受講希望者、約50数名が集まり、急遽、補助席を増設してこれに対処する盛況ぶり。

内容は、同氏が最近ヨーロッパ各地を訪問されたときの話題を中心に、インテリアデザイン、ファッション等幅広い分野の色彩とデザインについて、スライドを使用しての2時間に及ぶ講演で、会場満席の受講者も盛んにメモを取るなど熱心な聴講ぶりであった。

●ニッポングッドデザインショー'73へ出品。

恒例の同ショーが10月6日～11日の6日間、愛知県産業貿易館に於て開催され、当中部支部も昨年と同様、NDC、NFD各中部支部と合同で出品。（詳細は次号に掲載）

中部支部　池田記

## 会員カードづくり

今回の作品展に参加した支部会員16人（23.1%）の職域別人員とその%は、経過報告に記入の通り支部を構成する職域別人員比と結果的に、はなはだしく食い違った数字となって現われている。作品展と云う事業が支部の総意でなかったのかも知れないし、或いは関西支部が地域的に特殊な職域構成をしているのかも知れない。

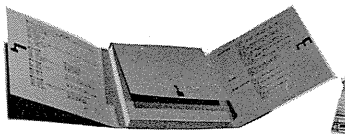
協会の職域調査表（会報NO58掲載）が56%のものでは、あまりあてにも出来ないのである。

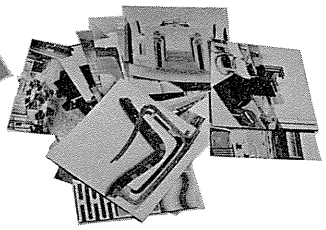
協会の事業計画や運営も全会員の職域別総意を反映した方向をさぐらないと空転することになりはしないかと思われる。

関西支部で今回作品展にご協力いただいた協賛企業各社のカード（社名・マーク・所在地・電話番号・企業のスローガン・営業品目などと代表商品を表に印刷したもの）を作り、同時に会員カード（氏名・ポートレート・住所電話番号・勤務先・所在地・略歴などと代表作品を表に印刷したもの）を追加して堅紙ケースに入れ、入場者全員に手渡した。協賛企業カード40社、会員カードは〆切迄に原稿入手14人（20.2%）、枚数はまことに貧弱なものに終ったとしても、兎に角第1回分として大型名刺14人分が出来たわけである。拡大して協会全員のカードが出来れば職域別データも引き出せるし、会員間のつながり、協会員の総意を理解する寄りどころともなること、考えられる。

関西支部　富田記

●日本パッケージデザイン協会の会員作品名簿





●関西支部の会員カードと堅紙ケース

## ●賛助会員紹介

| | | |
|---|---|---|
| 朝日木工株式会社豊川工場 | 愛知県豊川市豊川町幾通り15 | 豊川(05338)6-4171 |
| 株式会社 コスガ | 東京都中央区東日本橋2-15-4 | 東京(03)862-6711 |
| 株式会社 天童木工東京支店 | 東京都港区芝浜松町2-11 | 東京(03)432-0401 |
| 飛騨産業株式会社 | 岐阜県高山市名田町1-82 | 高山(0577)32-1001 |
| 富士ファニチァ株式会社大阪支店 | 大阪市福島区上福島北2-89 淀川ビル3F | 大阪(06)531-9740 |
| ネコス工業株式会社 | 横浜市戸塚区飯島町久保890-1 | 横浜(045)851-5761 |
| 古川工業株式会社 | 大阪市大淀区中津浜通4-5 | 大阪(06)371-0849 |
| 株式会社 ホウトク | 名古屋市中区錦2-15 協銀ビル | 名古屋(052)201-4101 |
| フランスベッド株式会社 | 東京都昭島市中神町1148 | 昭島(0425)43-2111 |
| 株式会社 オリエンタル中村百貨店 | 名古屋市中区栄3-5-1 | 名古屋(052)251-2111 |
| 株式会社 大丸装工部 | 大阪市南区鰻谷中ノ町38 | 大阪(06)252-0641 |
| 国際インテリア株式会社 | 東京都豊島区南池袋1-18-21 | 東京(03)983-9151 |
| 株式会社 モダンファニチャーセールス | 東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル | 東京(03)211-8351 |
| 日本総業株式会社（エアボン） | 東京都港区麻布飯倉片町10 | 東京(03)582-3341 |
| クラレ・インテリヤ株式会社 | 東京都港区六本木5-2-1 | 東京(03)403-9721(代) |
| 株式会社 ホクサン | 東京都江東区木場3-15-4 | 東京(03)641-5111 |
| 株式会社 木利屋 | 東京都港区新橋3-6-7 | 東京(03)503-1920 |
| 三好木工株式会社 | 東京都文京区湯島4-9-2 | 東京(03)813-5481 |
| 愛知株式会社 | 名古屋市東区赤萩町3-8 | 名古屋(052)941-6226 |
| 株式会社 寿商店 | 東京都千代田区有楽町1-14 | 東京(03)591-1311 |
| 株式会社 セミカインテリア | 東京都中央区京橋1-5-9 ヒダカビル4F | 東京(03)433-4171 |
| チトセ株式会社 | 東大阪市玉串町東2-1-1 | 東大阪(0729)62-1141 |
| 住江織物株式会社東京支店 | 東京都港区西新橋3-23-1 | 東京(03)984-2211 |
| トーソー株式会社大阪支店 | 大阪市城東区古市南通3-20 | 大阪(06)939-5721 |
| 東洋紡インテリア株式会社 | 大阪市北区富田町10 高橋ビル北館 | 大阪(06)361-6771 |
| 長谷虎紡績株式会社 | 大阪市東区横堀2-10 | 大阪(06)203-5921 |
| 藤井毛織株式会社東京事務所 | 東京都中央区日本橋堀留町2-3 | 東京(03)663-6631 |
| 内一商事株式会社東京営業所 | 東京都荒川区東日暮里6-36-12 | 東京(03)802-4471 |
| 株式会社 カワキチ | 東京都新宿区西大久保2-211 新宿専門店会館 | 東京(03)209-7001 |
| 株式会社 サンゲツ | 名古屋市西区小舟町2丁目14 | 名古屋(052)565-1133 |
| アイカ工業株式会社 | 愛知県西春日井郡新川町西堀江2288 | 新川清洲(0560)40-5311 |
| 住友スリーエム株式会社 | 東京都港区赤坂7-1-21 | 東京(03)403-1111 |
| 東洋ゴム工業株式会社 | 大阪市西区江戸堀上通2-5 | 大阪(06)441-3580・8801 |
| 富国株式会社 | 東京都中央区日本橋小伝馬町2-2 | 東京(03)662-1901 |
| 株式会社 高島屋 | 大阪市南区難波新地6-14 | 大阪(06)631-1101 |
| 株式会社 高島屋東京支店設計部 | 東京都中央区日本橋通4-1 北別館 | 東京(03)211-4111 内2157 |
| 株式会社 ニック(NIC) | 福岡市中央区天神1-11-17 福岡ビル | 福岡(092)77-2234 |
| 株式会社 ハヤミズ家具センター | 東京都台東区下谷2-7-2 | 東京(03)876-1111 |
| 揖斐川電気工業株式会社建材事業部 | 岐阜県大垣市神田町2-1 | 大垣(0584)81-3111(内線368) |
| 株式会社 トップトーン | 東京都葛飾区東四つ木3-44-15 | 東京(03)692-9097(代) |
| 株式会社 佐野紙芸インテリア事業部 | 京都府亀岡市曽我部町犬飼馬の上1 | 亀岡(07712)3-0661～4 |
| 佐治タイル株式会社 | 名古屋市北区山田西町3-106 | 名古屋(052)981-9531 |
| 東濃陶器株式会社 | 岐阜県土岐市駄知町1435 | 土岐(05725)9-3131 |
| 株式会社 アイ・エム・エス | 東京都港区南青山1-11-38 | 東京(03)402-1855 |
| 株式会社 日建設計 | 大阪市東区横堀2-38 | 大阪(06)203-2361 |
| 株式会社 カフアドハウス | 東京都港区西麻布2-13-12 早野ビル | 東京(03)407-2428 |
| 株式会社 竹中工務店東京支店 | 東京都千代田区神田錦町1-9 | 東京(03)294-2111 |
| 株式会社 ファースト東京支社 | 東京都港区赤坂4-1-32 赤坂ビル6F | 東京(03)585-2046 |
| 株式会社 商園 | 東京都渋谷区東1-26-26 富士ビル8F | 東京(03)407-8171 |
| 有限会社 フカツ商店 | 静岡県静岡市中島390 | 静岡(0542)82-3681 |
| 株式会社 小川商店 | 東京都渋谷区松濤2-18-2 | 東京(03)460-5771 |
| 株式会社 川島織物東京営業所 | 東京都千代田区永田町2-14-2山王グランドビル5F | 東京(03)580-4511 |
| 株式会社 東光堂書店 | 東京都中央区日本橋通1-5 中内ビル | 東京(03)272-1966 |
| 日本電気装備株式会社 | 大阪府東大阪市花園西町1-14-11 | 東大阪(0729)61-6321 |
| 松下電工株式会社 | 大阪府門真市大字門真1048 | 大阪(06)908-1131 |
| ヤマギワ電気株式会社 | 東京都千代田区外神田4-1-1 | 東京(03)253-2111(大代) |
| ヤマギワ電気株式会社 名古屋支店 | 名古屋市中区新栄町6-9 | 名古屋(052)931-2111 |
| 共同通信工業株式会社 | 東京都千代田区内神田1-17-11 | 東京(03)292-7671 |
| 株式会社 松坂屋 | 名古屋市中区栄三丁目16-1 | 名古屋(052)251-1111 |
| 株式会社 新宮商行東京支店 | 東京都中央区日本橋1-3-13 | 東京(03)273-7841 |
| 株式会社 フジエテキスタイル | 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-7-12 | 東京(03)403-3371 |
| 株式会社 アルフレックスジャパン | 東京都港区北青山3-5-6 | 東京(03)403-5351 |
| 中央設備エンジニアリング株式会社 | 名古屋市中村区笹島町1丁目223 | 名古屋(052)582-8201 |
| 日本ビクター株式会社デザイン部 | 横浜市神奈川区守屋町3-12 | 横浜(045)441-1291 |
| 内外木材工業株式会社 東京支店 | 埼玉県入間郡大井町亀久保1150 | 入間(0492)61-3611 |
| 内外木材工業株式会社 東京支店分室 | 東京都千代田区内神田1-14-8 長谷川第5ビル | 東京(03)292-3841～5 |
| 株式会社 三平興業装飾部 | 東京都千代田区岩本町1丁目5-13 | 東京(03)862-6161 |
| 共同印刷株式会社 | 東京都文京区小石川4-14-12 | 東京(03)813-1111(内線439) |
| **●新加入** | | |
| 鹿島建設株式会社建築設計本部 | 東京都千代田区霞ヶ関3-5-2 | 東京(03)580-1511(内線5141) |
| 山田照明株式会社 | 東京都千代田区内神田3-16-12 | 東京(03)253-5151 |
| 株式会社 ハック | 東京都文京区目白台2-9-3小田急目白台マンション1203 | 東京(03)945-1089・1789 |

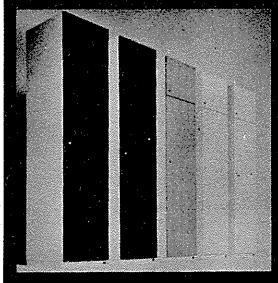
# 調和

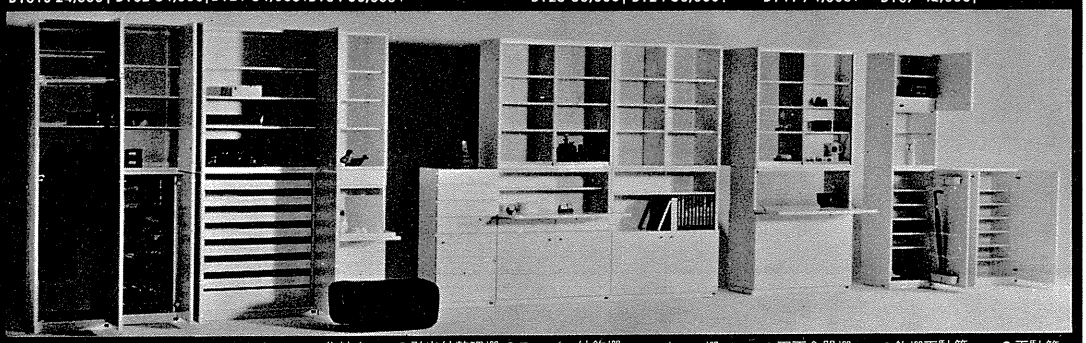
●永大産業は住まいの
建材・構造材・内装材・住宅機器のすべてに
ハーモニィーを
もとめます

内装材にはEDカーテン・EDカーペット・ED壁装材が加わり、今まで以上にトータルな内装施工をしていただけます。

新しい住まいにEDユニットファニチャーを開発いたしました。

●上下つみかさね式・18タイプのユニットを、お好みのセットにしてお使いいただけます。
●ドアーは5種類の色・柄からお選び下さい。





| | ●洋服タンス | ●整理タンス | ●和タンス | ●化粧タンス | ●引出付整理棚 | ●テーブル付飾棚 | ●本・TV棚 | ●両面食器棚 | ●飾棚下駄箱 | ●下駄箱 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | B601u-26,000 | B602-40,000 | B621-64,000 | | | | | B641-84,000 | B607-44,000 | |
| | B701u-25,000 | B702-38,000 | B721-60,000 | | | | | B741-80,000 | B707-42,000 | |
| | B501u-25,000 | B502-38,000 | B521-60,000 | | | | | B541-80,000 | B507-42,000 | |
| | B201u-24,000 | B202-34,000 | B221-54,000 | | | | | B241-74,000 | B207-42,000 | |
| | B101u-24,000 | B102-34,000 | B121-54,000 | B104-30,000 | | B123-60,000 | B124-50,000 | B141-74,000 | B107-42,000 | |
| ●前扉　ホワイトの場合の単価 | B101-54,000 | B103-52,000 | B122-86,000 | B105-54,000 | B106-46,000 | B125-70,000 | B126-54,000 | B142-62,000 | B108-50,000 | B127-76,000 |
| ●前扉　イエローの場合の単価 | B201-54,000 | B203-52,000 | B222-86,000 | B205-54,000 | B206-46,000 | B225-70,000 | B226-54,000 | B242-62,000 | B208-50,000 | B227-76,000 |
| ●前扉　チークの場合の単価 | B501-56,000 | B503-56,000 | B522-90,000 | B505-56,000 | B506-48,000 | B525-74,000 | B526-56,000 | B542-68,000 | B508-52,000 | B527-80,000 |
| ●前扉　オークの場合の単価 | B701-56,000 | B703-56,000 | B722-90,000 | B705-56,000 | B706-48,000 | B725-74,000 | B726-56,000 | B742-68,000 | B708-52,000 | B727-80,000 |
| ●前扉ローズウッドの場合の単価 | B601-58,000 | B603-58,000 | B622-94,000 | B605-58,000 | B606-48,000 | B625-78,000 | B626-58,000 | B642-70,000 | B608-54,000 | B627-84,000 |
| 台輪 | BW1- 1,600 | BW2S-1,600 | BW2W-2,600 | BW2S-1,600 | BW2S-1,600 | BW2W-2,000 | BW2W-2,000 | BW42-2,000 | BW2S-1,600 | BW2W-2,000 |
| ■前扉ホワイト・イエローの場合の小計 | 79,600 | 87,600 | 142,600 | 85,600 | 47,600 | 132,000 | 106,000 | 138,000 | 93,600 | 78,000 |

住宅総合メーカーのトップ

永大

永大産業株式会社

〒558大阪市住吉区平林南之町33番地
電話／大阪(06)681-1111大代表


## 編集後記

とにかく暑い、暑い夏でした。7月、それも8月に手のとどく頃に、いくら<期待される住い>を装置するとはいえ冷房の止った美術館内はむしぶろの如く、瀟洒なデザインにも拘らず明らかに期待を裏切るものではありました。「さあ、これで明日から開幕できよう！」と言ったのは会期前日の真夜中だったとか？（閑話休題）。

当62号は、関西で担当し、当支部がデザインイヤー協賛事業として催した<インテリアイメージ '73>展の特集号として編集しました。特集と云う以上、あらゆる視点から正確にその内容を伝え、かつ記録するのが建てまえでしょうが、如何せん力不足で意の如くならず大方の頭を疲れさせる結果となっていなければ幸いです。（本田）


機関誌・JID　Vol.14 No.62　定価 200 円
昭和48年12月発行　　印刷　田中印刷
発行所　社団法人　日本インテリアデザイナー協会
(〒150)東京都渋谷区神宮前2－3－16建築家会館3F
振替・東京・76389番　　電話（03）403－3649
The Japan Interior Designers' Association　JAA-Bldg., 3-16, 2-chome, Jingumae Shibuya-ku, Tokyo, Japan.

発行人・白石勝彦　編集　社団法人　日本インテリアデザイナー協会　会報委員会
担当理事　川上信二・川崎浩
委員長（関東）尾上孝一●三宅征郎・加藤帛子・光藤俊夫・高田紀久枝・山岸征史・泉修二
（関西）本田安治●柏原秀夫　長谷川紀子
（中部）林寅正●八代美代子・若園晃・宇賀敏雄・安藤清
（九州）白川雄渾・香川寿一


禁　転　載